

富山県のあゆみ



昭和48年

富山県

目次	
原始	6
古代	14
中世	24
近世	32
近代	46
現代	84



県の木 立山杉



県の鳥 雷鳥



県の花 チューリップ



刊行のことば

明治16年5月9日に、本県が石川県から分離独立して、ことしは90周年を迎えることになりました。

この90年の間に、わが富山県は立派に成長し、とくに産業経済の面での発展は実に目ざましいものがあります。

しかしながら、この経済を中心とする物質的な豊かさの反面に、各種のひずみが生じてきていることも否定できません。

今こそ物質的な豊かさから心の豊かさへ、人間としての生きがいを中心とした価値観への転換をはかるべきときであります。

私は、置県90周年を迎えるにあたって、本県の発展のあとをかえりみ、さらにきたるべき置県100年に向って、住みよく生きがいのある富山県の実現をめざして進みたいと存じます。花と緑の県づくり、総合的な福祉施設の整備、青少年の育成、芸術文化とスポーツ活動の振興、郷土をみなおすことなどを中心として、広く県民の皆さんのご理解を得て、幅広い県民運動として定着させたいものと考えております。

編集にあたっては、富山県史監修者高瀬重雄博士をはじめ、県史編さん専門委員、その他多くの方々の熱心なご協力を得ました。とくに次代を背負う青少年の皆さんに十分理解していただけるように、県内の多くの貴重な文化遺産を写真で系統的に紹介し、解説もできるかぎり難解な表現を避けるよう心がけました。

本書が、温故知新、明日への指標となり、また、ふるさとへの愛情を深めていただくために、いささかでも役立てばこれにすぎる喜びはありません。

昭和48年5月9日

富山県知事

中田幸吉





早春の立山連峰
高崎英之 提供

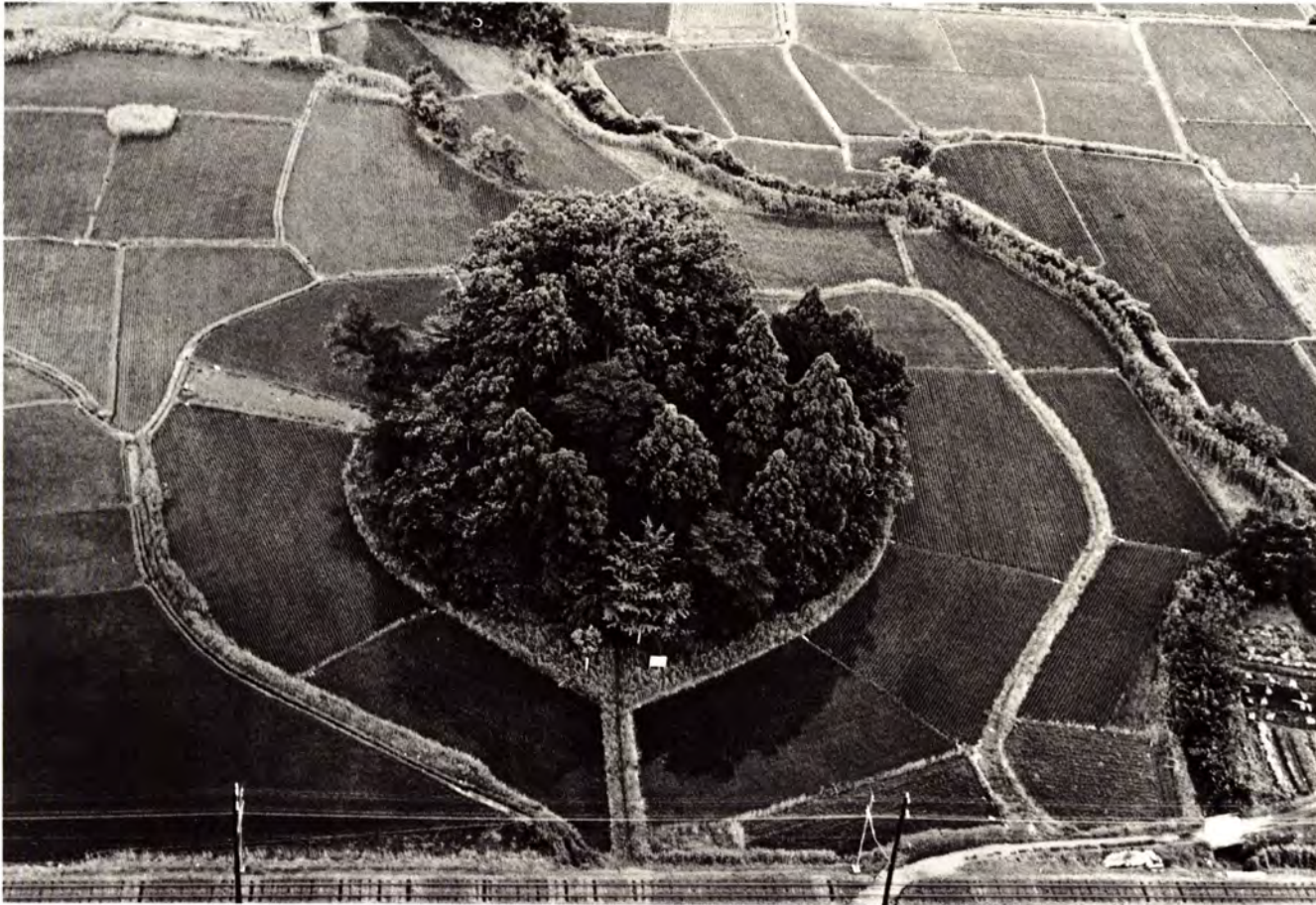
原始時代



バスケット型土器（氷見市朝日貝塚）
縄文中期の文化を代表するすばらしい
土器 大きな取手をつけ 胴には豪華
な文様がある

朝日貝塚の炉あと 大正十三年 日本
ではじめて発見された縄文期の住居の
あとである





ちこつか
稚児塚（立山町浦田） 富山県ではめずらしく平地にある古墳
で 県下最大の円墳である 封土はふき石でおおわれ 周囲に
は周溝か 周庭帯とみられるものがある 空からみた姿はみご
とである

先土器時代

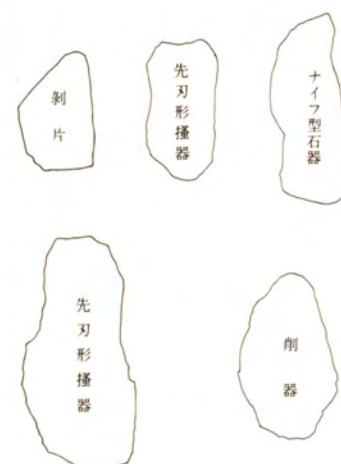
わたくしたちの郷土には、
ずいぶん早くから人間が住み
ついていた。いままでに見つ
かった限りでも数万年前のも
のと思われる古い石器がある。

このころの人たちは、まだ
土器の使用を知らなかったの
で、この時代を先土器時代と
か、無土器時代と呼んでいる。

先土器時代の遺跡は^{こうせき}洪積台
地の上であり、富山県では、
昭和27年上市川上流の、^{さっか}眼目
^{しん}新丸山A遺跡で、はじめてそ
のころの石器が発見された。
今日まで県下で40か所近くこ
の時代の石器が発見されてい
る。



石器（上市町眼目新丸山A遺跡）



石器（福光町^{ひと}人母^むシモヤマ遺跡）



石器（福光町^{ふく}嫁^け兼^か平^{へい}林^{りん}遺跡）

縄文時代

縄文時代は数千年に及ぶ長い期間にわたり、その遺跡は県下に約 500か所近く発見されている。

考古学の研究者たちは、この時代に出土した土器の形、文様、製作技術などをたんねんに調べ、類似した物を集めてこれを年代別に整理している。そして、縄文時代を早期、前期、中期、後期、晩期に大別している。

遺跡は多く台地上にあり、人びとは木の実のほか、しかやいのししなどの肉、海や川のさけ、ます、魚貝類などを主食としたと考えられる。



縄文早期土器（魚津市桜峠遺跡） この期の土器の多くはV字型で 土に穴をほったり 石でささえたりして使用した



尖頭器（婦中町長沢遺跡）
石器のうち最も古いもの

縄文時代の



縄文中期土器（宇奈月町愛本新遺跡） やもりのような動物がしっかりと口縁部にしがみついた めずらしい土器である



打製石斧（黒部市柄沢遺跡）



縄文後期土器（滑川市本江 広野新遺跡）
（上市町）



復元された住居（大沢野町春日）5・6人
ほどの人たちが生活していたと思われる



御物石器 北陸や岐阜県下に分布する特異な石器
である 宗教的なものにも使われたのだろうか



土偶（小杉町黒河出土）



弥生後期土器（高岡市赤祖父遺跡）

石ぼう丁（氷見市岩上遺跡）
稲は根本ではなく 穂首で刈りとられた



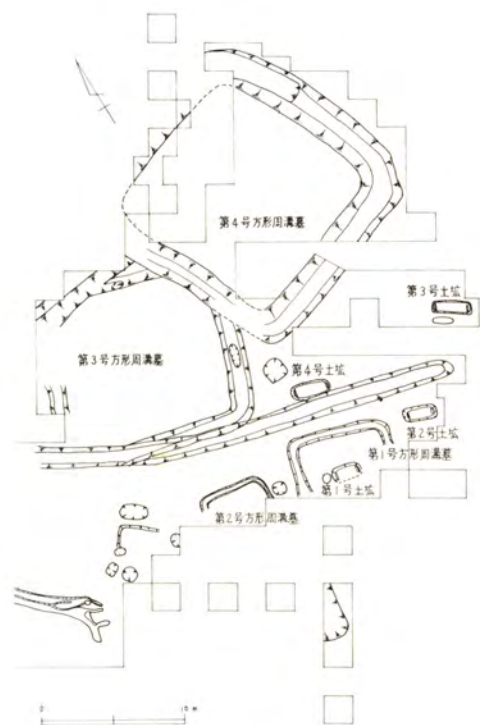
弥生時代

大正7年、氷見市大境の白山社の改築中に、大境洞窟が^{おおぎかい}発見された。この遺跡の調査によって、はじめて弥生時代が^{やよい}縄文時代より新しいということが実証された。

弥生土器は縄文土器に比べると、うす手がかたく、かざりは少ない。

この時代から定着農業がはじまった。遺跡は稲作に適した低湿地にみられるようになり、集落ができた。

小杉の^{かこいやま}囲山遺跡は、そうした集落の首長とおほしき人の墓であろう。



囲山遺跡全景と遺構分布図（小杉町囲山遺跡） 周囲をみおろす小高い岡の上に方形周溝墓が四つある 宅地造成のため消えさろうとしたが 保存のための措置がとられた

古墳時代

古墳時代は、3世紀の末ごろ近畿地方を中心にはじまり5世紀にその全盛期を迎えたといわれる。

県内には若宮・王塚・桜谷古墳などの前方後円墳、稚児塚などの円墳、大小200近い高塚古墳のほか、城ヶ平・加納・番神山・桜町・江道などの横穴群で二百数十の横穴がみつまっている。

この時代、畿内の勢力が当地方に及んでいたことは、古墳や、古墳の中から出土する副葬品などによって知ることができる。

そのころは弥生式土器のながれを受けた土師器が使われていたが、6世紀からは登りがまを用いて、高い熱度で焼いた須恵器も、あわせて使われた。



桜谷古墳群（高岡市太田） 前方後円墳2基と円墳と推定されるものが9基以上あつたが いまは2基が残るのみである



王塚古墳（婦中町羽根小平）



加納横穴群（氷見市加納）山腹にはこのような横穴がたくさんある



内行花文鏡（高岡市桜谷古墳）



上 切子玉と勾玉（福岡町城ヶ平横穴）



下 鉄製 鋒（氷見市朝日長山古墳）



土師器（小杉町中山南遺跡）



須恵器（氷見市朝日長山古墳）



浜山遺跡の玉類（朝日町浜山遺跡） 浜山遺跡で 完成品のほか 原石 未成品やたたき石 砥石などの工具が見つかった

古代

越中国のなりたち

北陸地方が越前・越中などに分けられる前は、まとめて越国こしのくにとよばれ、東北地方の蝦夷えまと接していた。そして、大和朝廷やまとの勢力が強まり、蝦夷征討が行なわれるようになると越国はその基地として重んじられた。

越中国が越国から分かれて成立した時期は7世紀末であるが、その後も国域には変更が加えられている。越後の一部や能登四郡が越中国に属するなどしたのち、8世紀中ごろ現在の県域に近くなった。

越中国の国府は国分寺とともに高岡市伏木にあったといわれ、軒瓦などの遺物が出土している。

越中国守の名がはじめてみられるのは、天平4年(732)に任命された田口年足たぐちのとしたりである。

また大和朝廷が日本海をこえて、渤海国との交流をするようになると、越中国府では役人に渤海語を学ばせたりした。



越中国 国印



平城宮跡出土木簡 利波郡河上の里からフナの脂しが都におくられた 和銅3年(710)は平城遷都の年である



平城宮跡出土木簡 能登国の羽咋郡がこの当時越中国に属していたことがわかる



国府 国分寺跡付近（高岡市伏木）
 写真中央上部に勝興寺がみえる この付近
 に国府があったといわれる
 写真下部の弯曲部に寄棟の薬師堂がみえる



単弁蓮華文 軒丸瓦
れんげしん のきまるかみ
 このような瓦は 勝興寺や
 薬師堂付近から出土した



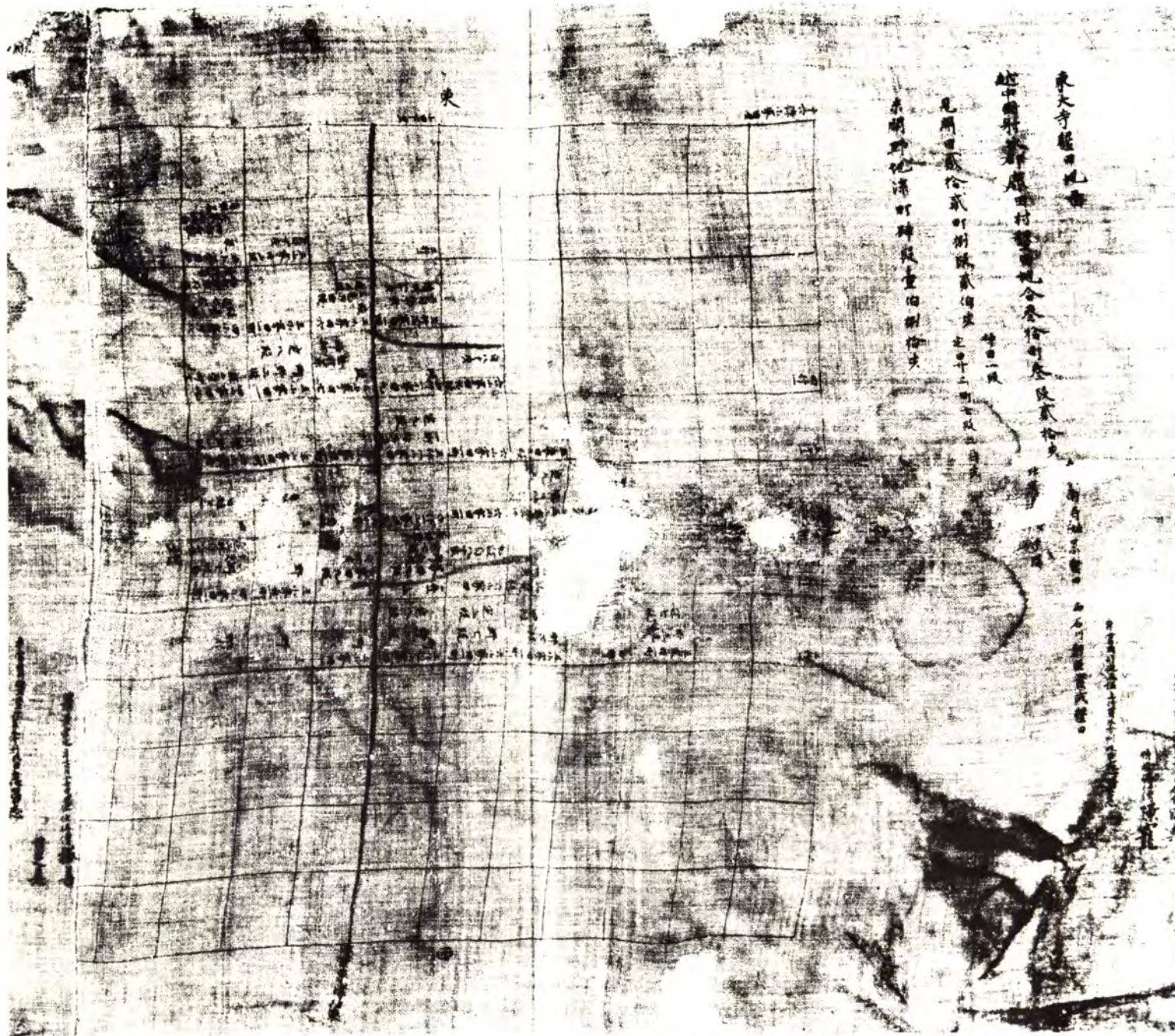
国分寺跡と推定される薬師堂付近

めばえる荘園

奈良時代の中ごろ三世一身さんせいいつしん法や墾田永世私財法こんでんえいせいしさいほうが發布され、律令社会を経済的に支えていた公地制度はくずれていった。有力な貴族や社寺は開墾や買い入れによって大土地所有者になっていった。

越中においても、大和の東大寺とうだいじが広い土地を占定し、班田はん農民や浮浪人を使って開墾をすすめた。また豪族たうぶく砺波臣志留志しるしが、東大寺に米を献じて官位につくなど、地方豪族も東大寺の荘園形成とその経営に大きな役割をはたしていた。

こうした奈良平安期の荘園の建物の遺跡だといわれるのが井波町高瀬遺跡や入善町じょうべのま遺跡で、そこから木簡ぼくせんや墨書土器などを含む貴重な遺物が発掘されている。



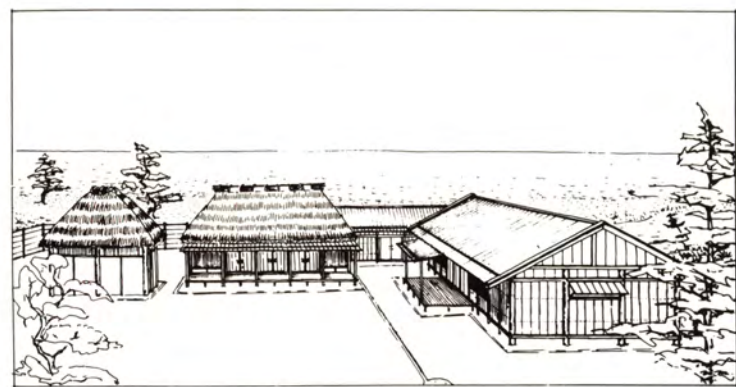
越中国東大寺開田図 神護景雲元年（767）東大寺は射水郡鹿田村を開墾するためにこの絵図面を作らせた 左右に砺波臣志留志の署名もみえる このような越中国内の開田図は17枚ある



じょうべのま遺跡（入善町田中）



墨書土器 じょうべのま遺跡から
発掘された土師器の裏面に「西庄」
「寺」などと書かれている



掘り出された柱穴などにもとず
いて作られた復元住居想像図



大伴家持銅像（高岡市二上山）



大伴家持歌碑
（新湊市放生津八幡宮境内）



阿尾の海遠望（氷見市阿尾）

万葉のころ

天平18年（746）、大伴家持^{おおとものやかもち}は越国^{こしのくに}に国守^{くにのまもり}として赴任^{ゆにん}し、満5年の間越中に在任した。しかし越中における家持は、朝廷の役人としてより、越中の自然に詩心をそそられた歌人としてその名を今にとどめている。「万葉集」には立山をはじめ、越中の山河・風物を詠んだ歌が多く^よのせられており、また英遠^{あお}（阿尾）刀奈美^{たなみ}（砺波）・可多加比^{かたかひ}（片貝）などの地名をはじめ、あしつき・かたかごなど植物の名にも古代の人びとのおおらかなころがうかがえる。



大伴家持歌碑
（氷見市上田子藤波神社境内）



婦負川の早き瀬ごとにかがりさし
八十伴の男は鶴川立ちけり

鶴川立の図

古代の人々と立山

越中平野から仰ぎみる立山は、雄大で、神秘的な美しさをもっている。

古代の人びとは、この山を神がやどる霊山と考え、立山を神のやまとしてあがめていた。

大伴家持は立山をたたえる長歌の中に、「すめ神のうしわき坐す^{いま}新河^{にいかわ}の^{たち}その立山に……」と、古代人の山への崇敬をよみこんでいる。



立山山頂の図



雄山神社前立社壇（立山町岩峯寺）



万葉歌碑（呉羽山）



立山開山縁起絵（部分）

立山開山伝説

越中の国司佐伯有若の子、佐伯有頼は、父のかわいがっている白鷹をにがしてしまいました。

白鷹をもとめて、有頼は山深く入りこんでいきました。あくる朝一人の行者が現われ白鷹のいどころを教えてくださいました。

有頼がなおも奥に分けいると、一頭の熊が襲いかかってきました。有頼はいそいで矢を放ちました。熊は血を流しながら、玉戸の岩屋ににげこみました。

岩屋の中をのぞこうとすると、不意に中から、胸に矢きずを負った阿弥陀如来が現われ、有頼は自分の射た矢であることを知って、驚きひれ伏

しました。

阿弥陀如来は、この山は人人を救うため、地獄極楽を備えて、汝を待っていたのだ。すみやかに出家して、この山を開きなさいと諭しました。こうして有頼は入道して慈興上人となり、立山を開いたといわれています。

古い時代に書かれた書物の中には、佐伯有若によって開かれたと書かれたものや、立山の狩人によって開かれたと書かれるものもある。佐伯有若は架空の人物と考えられていたが、京都の随心院文書の中に、その署名がみつき、実在した人物であることが証明された。



慈興上人座像



矢きずの阿弥陀如来像



立山曼陀羅の図 立山開山縁起や
地獄・極楽などをえがいたもの



社
婦
尊
像

立山の修験道

古代の人々が神として仰いでいた立山は、平安時代の中ごろ天台しゅうげんじやの修験者の修行するところとなっていた。このころの説話集『今昔物語集』こんじゃくものがたりしゅうにも「修行僧越中立山に至り」とあり、立山は修験者の霊地であったことがうかがえる。

大岩山日石寺まがいぶつふどうの摩崖仏不動明王みょうおうは、上市川・白岩川ぞいにさかのぼり、立山に登った修行僧によって刻まれたものであろう。また古い錫杖しやくじょうの頭部が剣岳の頂上や大日岳から出土したことも、これら修験者の活動をしのばせてくれる。



日石寺摩崖仏 本尊不動明王像は藤原時代につくられ 修験道のさかんなころの彫刻で 摩崖仏の代表の一つである



銅錫杖頭（大日岳出土） この錫杖は 平安時代前期のものと推定される 小形の錫杖であるが張りが強く美しさがある

古代の芸術・学問

越中における古代の芸術のうち、代表的なものに大岩山日石寺の摩崖仏がある。本尊の不動明王は、高さ 346.3cm あり、右手に剣、左手に羅索（ろさく）と宝珠をもって、前方をにらみきびしい形相（かたち）をしている。

その他古代の彫刻としては常楽寺（婦中町千里）の十一面観音像・聖観音像、安居寺（福野町安居）の聖観音像などの木造仏があり、いずれも藤原時代初期の作品である。また金銅の仏像には、本覚寺（婦中町富崎）と千光寺（砺波市芹谷）に観音菩薩像がある。ともに奈良時代の作とみられるが、素朴な飛鳥仏の風をよく残している。またこの時代に越中射水郡出身の学者三善為康がいた。為康は算博士になり平安時代における有数の学者として知られている。



安居寺聖観音菩薩像



常楽寺十一面観音菩薩像



二上山射水神社男神像

中世

成長する武士たち

保元・平治の乱は武士を社会の最上層におしあげ、平氏政権を生みだした。しかし、しだいに反平氏勢力が強まり源氏を棟梁として諸国の武士団が結束し始めた。信濃国木曾の源義仲が挙兵し、城資永を破って越後の国府にはいると、越中でも新川の宮崎党や砺波の石黒党などの有力武士団が義仲を支援した。寿永2年(1183)義仲は越中・加賀の国境で、平維盛の軍勢をうちやぶった。これが有名な倶利伽羅合戦である。義仲は、にげる平氏を追って京都に攻め入ったが、翌年源義経によって近江国粟津で滅された。義仲に従っていた越中武士たちもむなしく帰郷した。



倶利伽羅合戦絵図 木曾義仲は加越国境の倶利伽羅谷で火牛の法を用いて平維盛の軍勢を破ったといわれる



宮崎城址(朝日町)

殖生八幡宮 義仲は倶利伽羅合戦の前に願文を奉じ 戦勝を祈ったといわれる



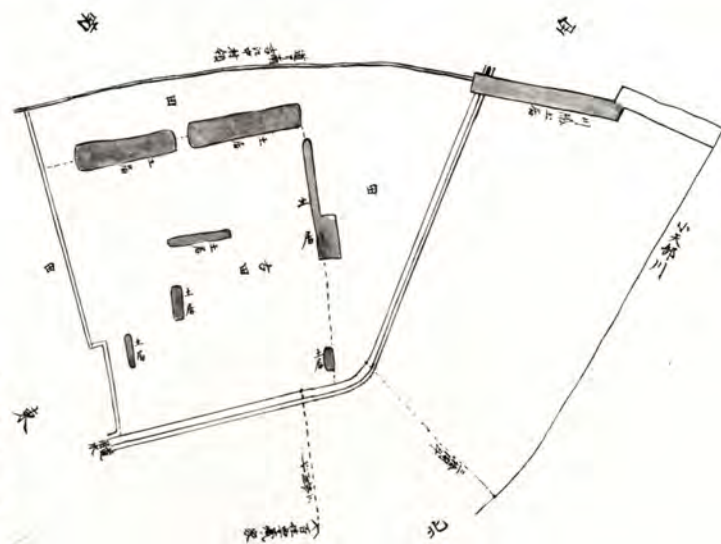
うつりゆく荘園

平安時代の王朝文化がはやかなころ、荘園制はますます発展をとげていた。荘園領主たちは自分の荘園を守るために、都の有力な貴族や社寺に荘園を寄進し、その権勢によって不輸不入の特権をえ、国司などの介入をしりぞけようとした。有力な貴族や社寺への荘園集中の動きは、荘園を新しく立てることを認めないという朝廷の方針にもかかわらず、やまなかった。

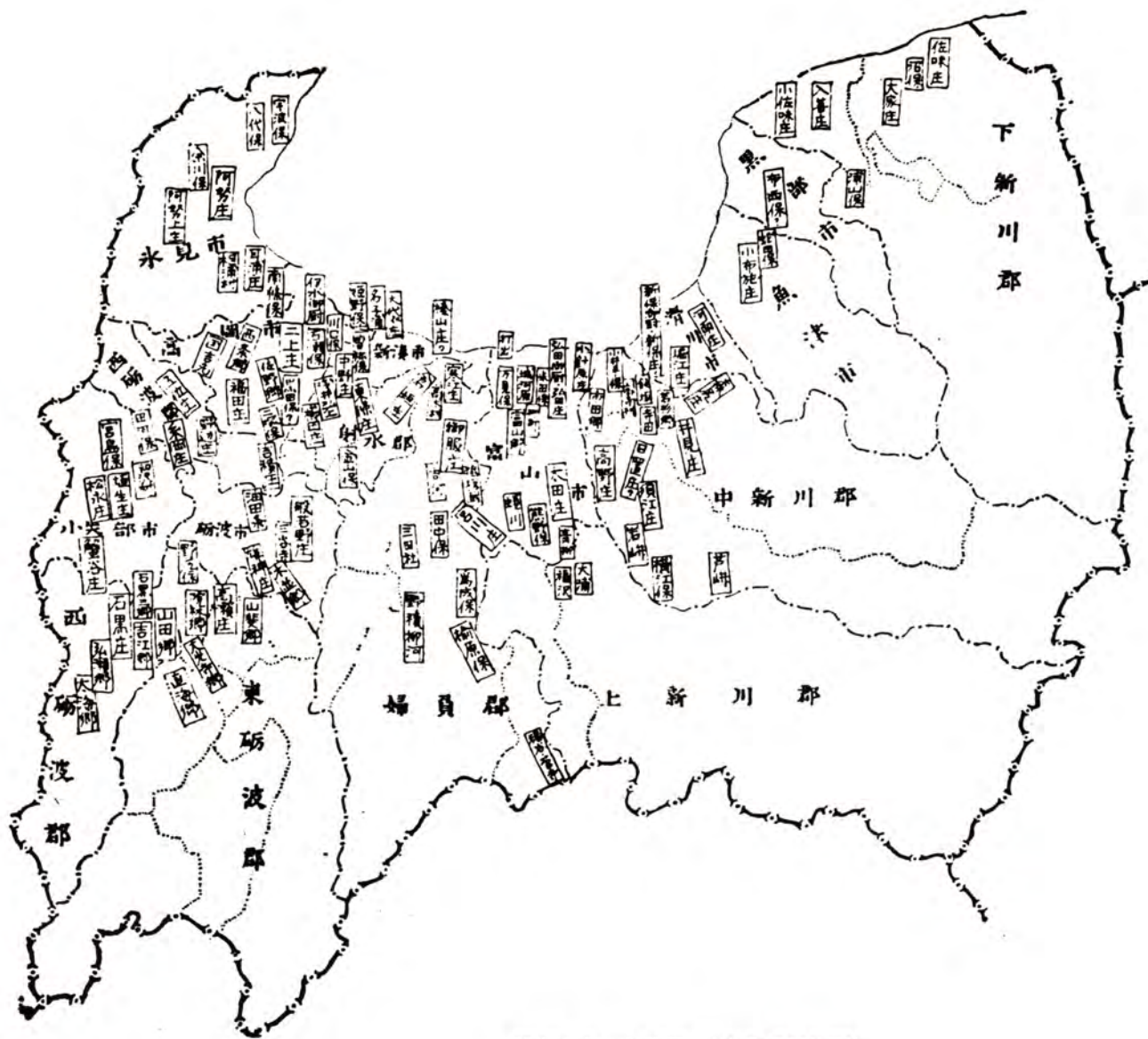
鎌倉幕府のもとで荘園に地頭がおかれ、武士が大きな力をもつようになると、地頭たちは荘園領主と年貢の取り分をめぐる争いをおこすようになった。たとえば堀江庄（京都祇園社領）でおきた争いでは、鎌倉幕府の裁決にもちこまれ、領家と地頭との間で土地を分けあう“下地中分”という方法がとられた。

こうして武士の荘園進出はつづけられ、荘園制はその内部から変質していった。

太美組 純部村領有之屋跡
南北 約八四程
東西 約六四程



武士の館あと 福光町遊部のもの 江戸時代の実測図である 二重の土居がめぐらされるなど中世の武士の館の様子がかがえる



越中にあった荘園 (木倉豊信作図)

守護と守護代

鎌倉幕府は、全国公領に、主として治安を維持するため守護をおいた。北条氏の一門の名越氏が越中の守護に任じられ、放生津に館をかまえた。元弘3年(1333)守護名越時有は越中の国侍たちにそむかれ、一族79人とともに放生津の海に身を投じて滅びた。

南北朝時代、越中の武士たちは、南朝方や北朝方について互いに争い、普門俊清・桃井直常・斯波義将など何人も守護が交代した。

康暦2年(1380)、畠山基国が越中の守護になってから、越中の守護は代々畠山氏が世襲するようになった。

畠山氏は斯波・細川氏とともに、管領として幕政をとりしきっていたので、越中の支配はほとんど守護代の遊佐氏や神保氏に任せていた。

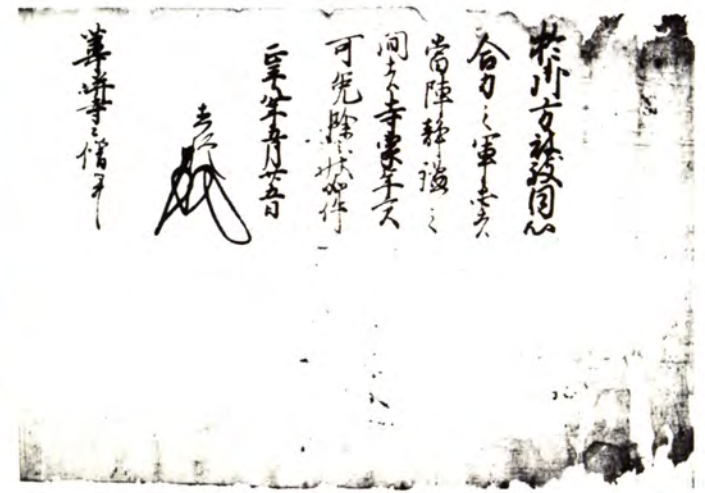
桃井直常は越中の国侍たちを引きつれて、京都に二度も攻め上り、神保長誠は応仁の乱の細川方の立役者となった



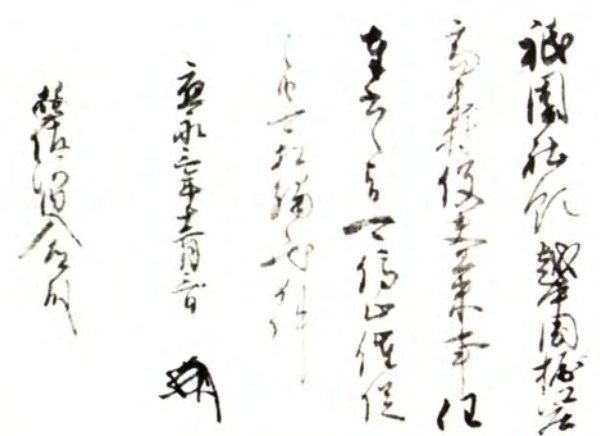
奈呉の浦(新湊市) 守護館のあった放生津は国府に変わって栄えはじめた



神保長誠肖像



桃井直信軍勢催促状 県内に現存する最古の文書である



畠山基国遵行状 守護代遊佐長護に堀江荘の祇園社役夫工米について命令している



遊佐氏館址の土塁(小矢部市蓮沼)

一向一揆

越中には本願寺しやくにょ ねんの綽如にょや蓮れん如にょがやってきて、井波の瑞泉ずいせん寺や、勝興寺どやまの前身、土山御坊あかおのどうしやうを建て、また赤尾道宗のような熱心な信者が出たことにより一向宗(浄土真宗)は広く民衆の中に広まっていった。

本願寺門徒がふえるとともに、瑞泉寺あんようや安養寺いおうぜん(勝興寺)などは、天台宗てんたいしゆ医王山やこれと結ぶ勢力を退け、約1世紀の間、砺波地方を支配した。

越中や加賀の門徒衆が、国侍に反抗しておこした一向一揆は、越後から攻めこんできた上杉謙信の祖父なが およしかげ長尾能景を砺波で討ち死にさせたり、神保しいをや椎名らの支配をおびやかしたりした。



戦う一向宗徒



瑞泉寺(井波町)



能景塚(砺波市頼成新)

越中の統一

戦国時代の越中には、神保・椎名の有力な武将がいた。神保氏は椎名氏より勢いが盛んであったが、椎名の後だてには越後の上杉氏がついていた。

上杉謙信はしばしば越中に攻めこみ、神保の力を弱らせた。その後武田信玄方に寝返った椎名氏や一向衆徒を破って、能登にまで攻めこんだ。

謙信の死後、織田信長は京都にのがれていた神保長住、ついで佐々成政を越中に派遣した。

成政は魚津城を中心に勢力をもっていた越後勢や、これと結ぶ越中の国侍を追放し、越中の統一を完了した。

成政は秀吉にしたがわず、前田利家らと争ったが、同盟を結んでいた徳川家康らが秀吉と和睦したため、孤立してしまい、やがて秀吉の軍門にくだった。



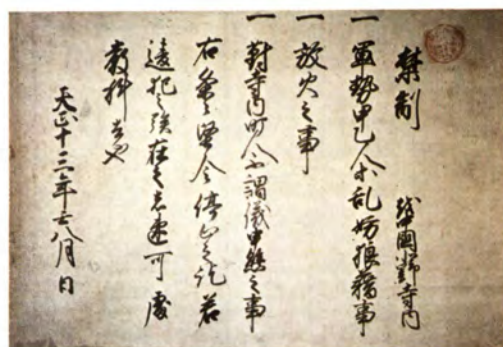
神保氏のいた守山城址（高岡市）



椎名氏のいた松倉城址（魚津市）



佐々成政肖像



豊臣秀吉禁制状



上杉謙信花押



前田利家肖像

中世の仏教

鎌倉新仏教の展開は、越中においてもめざましかった。浄土宗では法然ほうねんの弟子光明房こうみょうぼうがいた。時宗では氷見・新湊・福光あたりに信者がいた。日蓮宗では京都本能寺の開山となった日隆にちりゅうが越中から出た。臨済宗では国泰寺をはじめ、甲利かっさつ(五山・十刹じっさつに次ぐ地位)の興化寺などが室町時代の越中守護しほの斯波・畠山氏はたけやまなどの勢力を背景にして栄えた。こうした禅院からは五山文学に名を残す詩僧を多くだした。また北陸地方を中心にひろまった曹洞宗そうとうしゅうにおいても、眼目がんもくの立川寺りゅうせんじなどを中心にひろまった。

これらの新仏教に対して、天台真言宗の動きも活発で、医王山惣海寺いおうせんそうかいじや石動山天平寺せきどうさんてんびょうじには僧兵もたくわえられていた。また修験道など山岳信仰もひろく支持されていた。

本願寺ほんがんじの綽如しゃくよや蓮如れんにょらの布教によってひろまった浄土真宗は、これら諸宗と時に争い時に妥協しながらしだいに勢力を大きくし、越中は真宗王国といわれるまでになった。



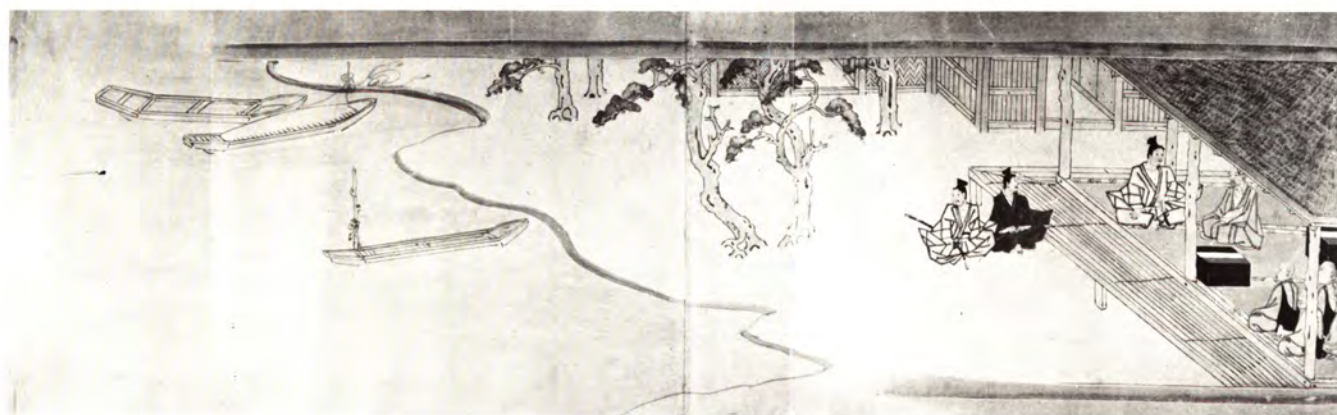
本法寺曼陀羅28品のうち1品 宝塔を中心に仏の世界などがえがかれている



大徹宗令禪師像
大徹は立山寺をひらき 各地に曹洞禅をひろめた



摩崖仏 (黒部市嘉例沢)



一遍上人縁起絵 遊行上人他阿が放生津で南条九郎を教化する場

文化のひろがり

武士の世になって、文化も平安時代と違った武士や民衆の姿を映したものがみられるようになった。

仏像彫刻は平安時代の定朝じょうちよう様式に加えて、運慶うんけい・快慶かいけいらがでてきて新しいいぶきをふきこんだ。民衆生活に根ざした写実性をもち、地方性をおびた仏像も作られた。また絵巻物による布教活動も行なわれ、武士や民衆にとって文化は身近なものになってきた。こうした地方文化の普及とともに、越中においても工芸品こうのよしひろに郷義弘ごうぎひろに代表される刀剣、黒部周辺の金屋かなやの梵鐘ぼんしょう、氷見ひみ宗忠むねただの能面などの秀作がつけられた。活発な宗教活動とともに、社寺が数多く建てられた。岩嶺寺いわくらじの雄山神社本殿や平村の白山宮本殿などに当時の様式が残っている。

文学においては、平家物語や太平記などに越中武士の活躍が描かれ、戦国期ほうじょうすの放生津では神保氏などが宗祇そうぎらをまじえて歌会が催されたりした。また越中の風土は中央の文人の和歌や漢詩などによまれ、紀行文や謡曲の中にも登場している。



常福寺阿弥陀如来像



十三寺馬頭観音像



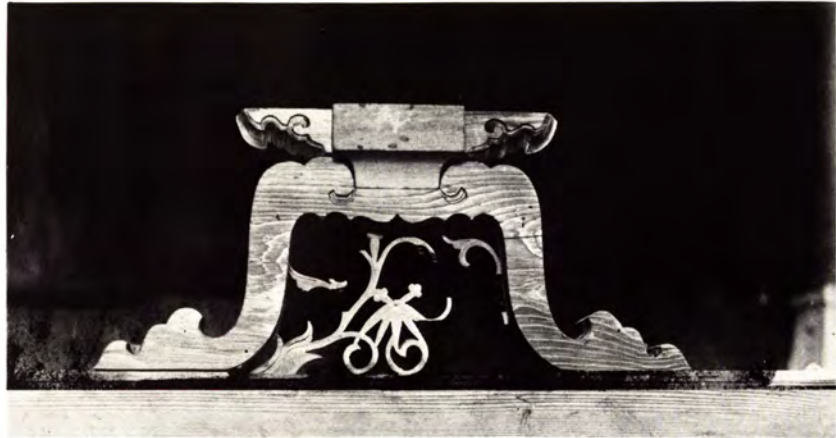
立山神像



総持寺千手観音像



氷見宗忠作の能面（左瘦男 右蛙）
氷見宗忠は 室町時代の代表的な面打ちの
一人である 氷見の出身といわれている



白山宮本殿のかえるまた（平村上梨）



経王寺梵鐘（新潟県糸魚川市） 新川郡
の前沢金屋の鋳物師によって作られたも
ので 永享4年（1432）の銘がある



宗良親王歌碑（氷見市小境）

有磯海のうらふくかせもよはれかし
いひしままなる浪のおとかは



刀 郷義弘作と伝えられ 名物富田郷とよばれ
ている

近世

藩政の成立

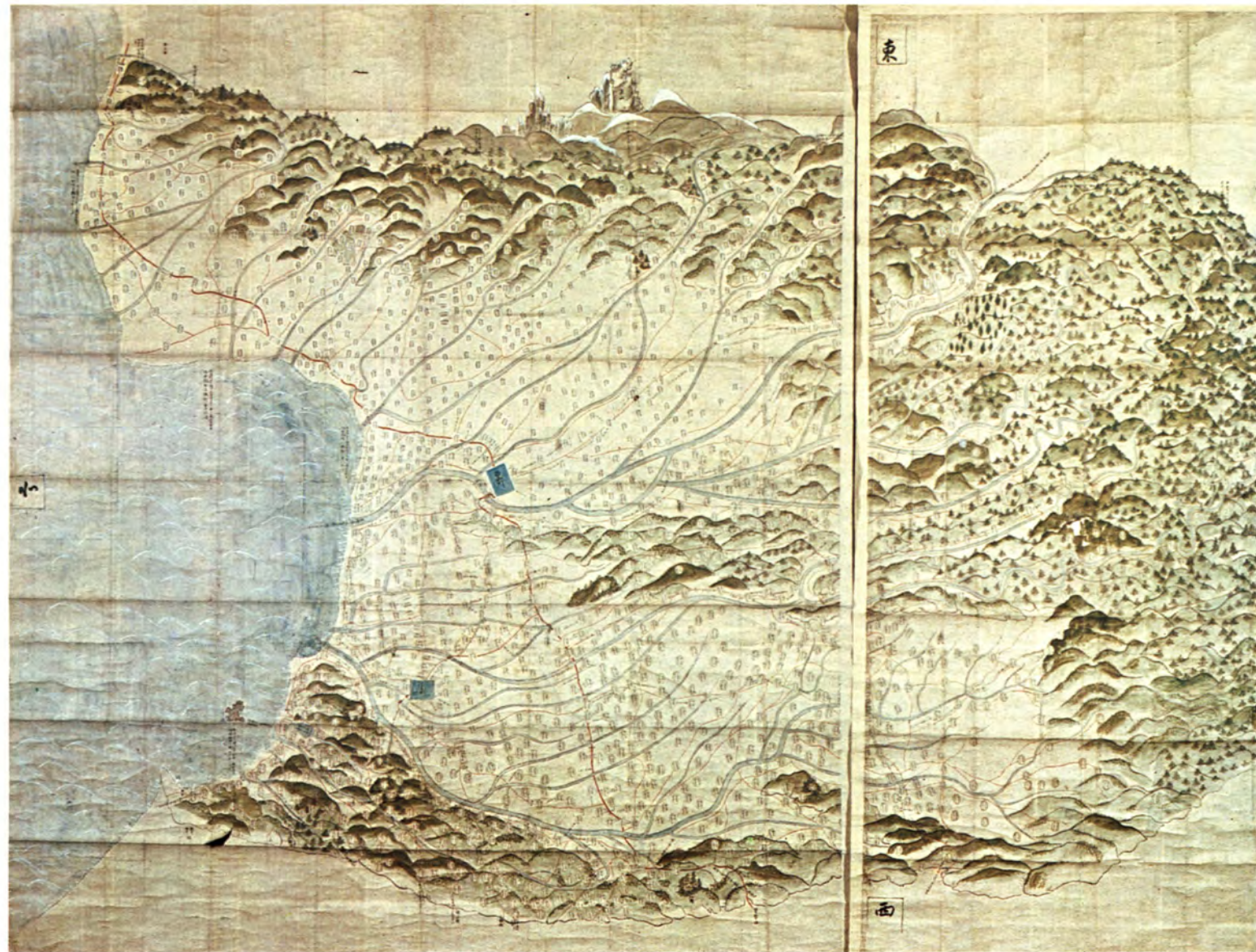
成政を降した秀吉は、成政の領土を新川1郡だけとし、他の3郡は前田利家の長男、利長に与えた。

利長ははじめ守山城にいたが、やがて富山城に移った。しかし富山城が火災にあったため、魚津に移り、ついで高岡に城を築いて、そこに移った。

加賀藩3代目の藩主前田利常は、次子の利次に富山10万石を与え、これを支藩とした。

富山藩の領域には、はじめは黒部川の近くの村々なども含まれていたが、万治2年（1659）領地がえが行なわれ、婦負郡と新川西部に領地が集められた。

利常の時代から高岡城は廃城となり、高岡にいた武士たちは金沢に移った。



越中四郡絵図 近世初期に作られたもの



富山城址



高岡城址



前田利長の墓碑（高岡市関）



瑞竜寺（高岡市関）
前田利長の菩提寺

町と街道

江戸時代になって平和が回復し、産業が盛んになるにつれて、城下町、宿場町、門前町などいろいろの機能をもった町々がつくられた。越中においても富山・高岡などの城下町、^{いまいるど}今石動・泊などの宿場町、井波・城端などの門前町のほか、魚津・氷見などの町が生まれた。

富山は、戦国時代にはすでに城下町としての性格をもっていたが、江戸時代には富山藩10万石の城下町となり、政治・経済の中心として栄えた。富山の町の規模は、安永八年(1779)の調査によると、家数6079軒、人口1万7600人であった。

高岡は利長の築城により城下町となったが、廃城後は銅器・漆器の生産や市場・問屋がつくられるなど商工業の活発な町となった。

また宿場町の指定や関所の設置などにより、北陸街道・^{ひだ}飛騨街道その他の街道も整備された。

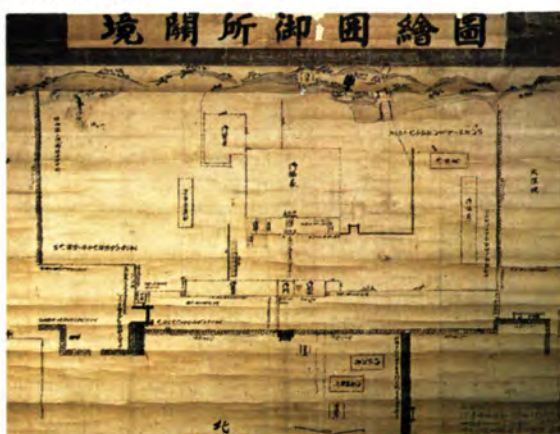


愛本のはね橋の図



富山城下の絵図

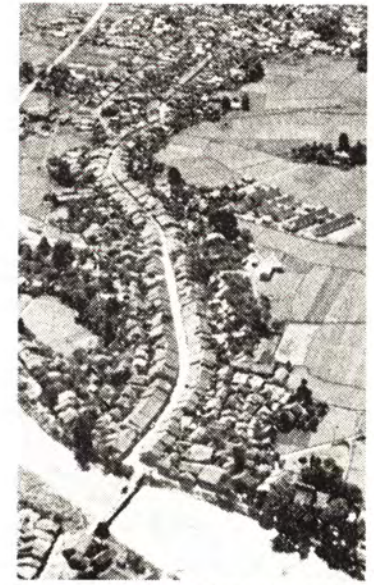
境関所の絵図



一里塚(朝日町境)



神通川籠の渡し



宿場町のおもかげを
残したころの石動町



高岡城下の絵図



船橋の図



北前船絵馬額
北前船は 松前や
大阪に航行し 米
材木 魚肥などを
運んだ

農業の発達

兵農分離が行なわれ、農民たちは農業に専心するようになり、近世の初めごろには全国的に用水の開発・新田開発が盛んに行なわれた。

越中でも射水郡や婦負郡の農民たちは、加賀藩に願い出て、牛ヶ首用水の工事をはじめた。藩も積極的に資金や資材を出し、用水方奉行を派遣した。用水は10年間で一応完成し、この用水によって開かれた新田は2万5千石になった。その後取り入れ口をふやし、分水施設などを作り、四万石用水と呼ばれるようになった。

農業の技術も発達し、収穫高も増加した。加賀藩・富山藩は村ごとに耕作面積と耕地のよし悪しを調べ、年貢の量を定め、その外にも小物成といういろいろの税金をとった

両藩には十村と呼ばれる大庄屋がおり、村々には肝煎・組合頭などの村役人がおかれた。

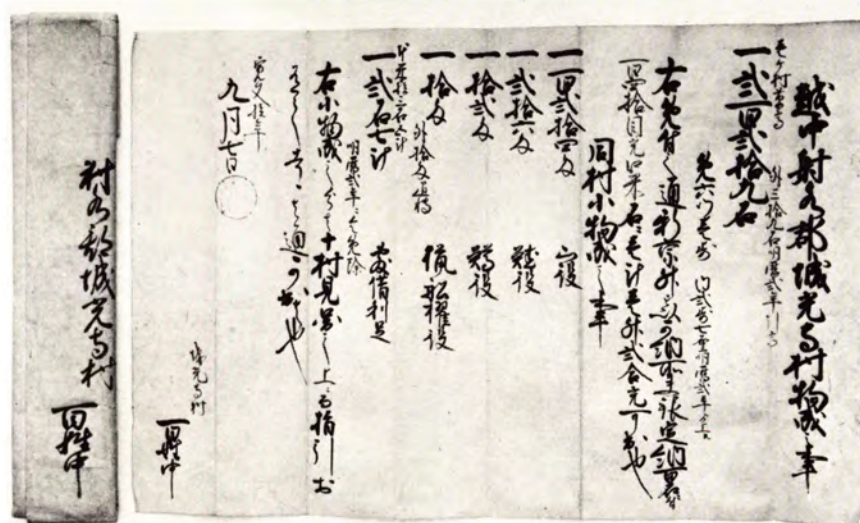


牛ヶ首用水絵図

農作業の図



せんばこきを使用するようになって 作業ははかどった



村御印 村ごとの草高や 税率 小物成の額などを定め 藩主の印を押して村ごとに下付した



奥山廻り役の浮田家（富山市太田本郷）

越中の特産物

江戸時代は、貨幣経済の伸長期で、地方の特産物の生産が盛んになり、領外へも多く販売されていた。越中においても、いろいろな特産物が生産され販売されていた。

富山の売薬は、「越中富山の薬売り」の名で全国に知られ、配置販売制にその特色がある。富山の売薬は、元禄のころに始まったといわれるがその後売薬人仲間同志のきびしい規制と団結、忍耐や薬の品質がよかったことなどからしだいに販路を拡大していった。また幕末のころには、富山で2600人余りの売薬行商人がおり、この他射水・高岡・水橋などにも、多くの売薬行商人がいた。

また町や村々において、絹織物(井波・城端^{しもの}木綿(新川・福野)布(砺波)和紙(八尾)菅笠^{すげがさ}(石動・福岡)などの特産物が生産された。

鉱山には、松倉金山^{けた}・下田銀山などの鉱山があった。近世の初めのころには、おびただしい量の金や銀などが掘り出された。

沿岸漁業は、台網^{たいあみ}(定置網)にその特色があり、灘^{なだ}・氷見・放生津・魚津などの浦に台網がおろされ、ぶりなどが大量^{みずあ}に水揚げされた。



薬の配置箱



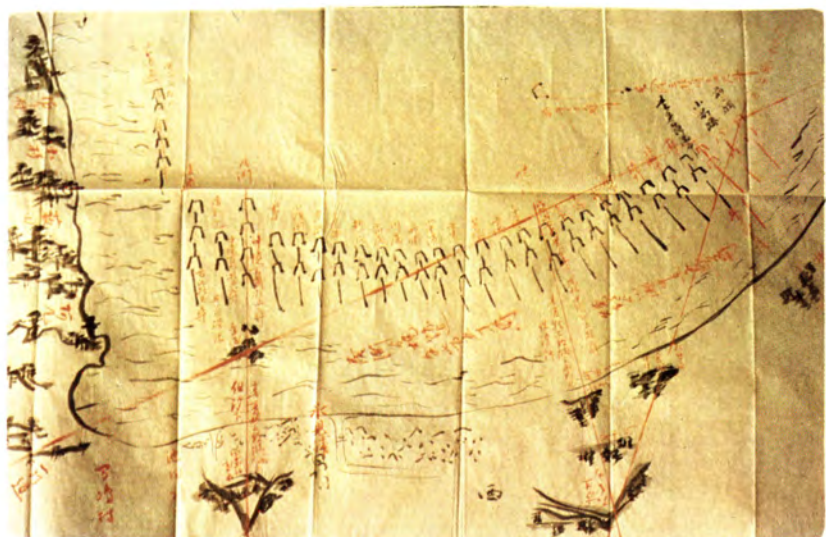
売薬の懸場帳 懸場帳は 安定した得意先の帳簿で 売薬人相互の間で売買され 売薬人の財産である



藩主前田利保採品の写生図



薬研と下榼 粉薬をつくる薬研と丸薬をつくる下榼は 製薬の重要な道具であった



氷見浦の台網配置の図

木綿機へる図（経糸を機にかける）



木綿かせ糊とし懸干す図

すきあげたる紙を板に張りほす図



紙すきの図

鉱山の絵図（部分）



採鉱の図



製錬の図

文化

1. 教育と学芸

近世になると、教育や学芸は、武士階級はもちろん庶民階級にまで広まった。

まず教育についてみると、武士の子弟のために藩校が設けられ富山藩では広徳館が、加賀藩では明倫堂が設けられた。また庶民の子弟には、漢学を教える私塾や実用的な手習いを教える寺子屋があった。

学芸では、富山藩10代藩主としやす ほんぞうがく 利保の本草学の業績のほか、関流の和算を始めて越中に伝えた中田高寛 たかひろ、その門人の石黒信由・五十嵐篤好 あつよし らが多く業績を残した。儒学には富山藩儒者南部三代、岡田順之 よりゆき らがいた。文学では俳諧が注目される。芭蕉 ばしやう がきたことに刺激された越中の俳壇は、芭蕉の弟子にあたる浪化 ろうか (瑞泉寺11代住職) を中心に、蕉風の俳諧が盛んになった。

越中の連歌は、寛文のころから奉納連歌として盛んになり、富山藩では連歌所 れんかどころ という役所をつくるほどの熱の入れようであった。

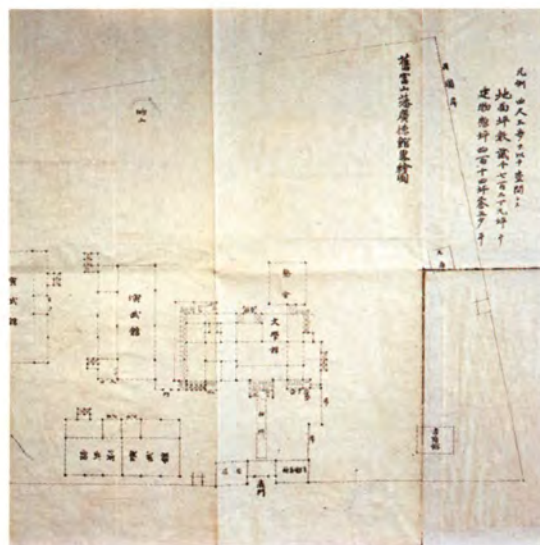
和歌では、10代藩主利保をはじめ五十嵐篤好・内山逸峯 うちやまいつぽう らがすぐれた作品を残している。



利保著作物の一部



南部三代(草寿 南山 景春)の墓
(富山市五番町光厳寺境内)



広徳館平面図



藩校広徳館にかかっていた孔子の像



高樹会文庫
石黒信由の蔵書や
著書が残っている



栖霞園(福光町)寺子屋のあと



浪化上人の図



黒髪庵 文化7年(1810)蕉風の俳人が建て 庭に芭蕉塚がある



井波八景の図(蘭台の句)
蘭台は瑞泉寺14代の住職で
天保のころ活躍した



井波八景の図(樗良の句)樗良は天明六俳客の1人で いくども井波にきており写生を得意とした 井波八景は樗良の作である



芭蕉句碑
(新湊市放生津
八幡宮境内)

早稲の香や
分け入る右は
有磯海



越中の俳書の一部

2. 美術・工芸

江戸時代の美術・工芸は、一般に小規模で形式化する傾向にあったが、その反面庶民にまで広まったところに特色がある。

越中の工芸品は、江戸時代のはじめごろ藩主をはじめ武士や富裕な町人・百姓のためにつくられたが、その後しだいに日用品にもすぐれたものがつくられるようになった。高岡の鋳物・銅器・漆器、城端の漆器、富山青貝細工、また丸山焼・小杉焼・瀬戸焼などにすぐれた作品が残っている。

絵画では、京都宮家の絵師になった佐伯岸駒、富山藩の御用絵師となった狩野派の山下守胤・木村立獄らが有名であり、また文人画に谷口霧山・吉田公均が出た。これらの作家の多くは明治の初めごろまで活躍した。

彫刻では神社仏閣の建築に木彫装飾を施すことが好まれ井波町に北村屋七左衛門など精巧な技をもった彫刻家が出た。



鶏の十二月（部分）山下守胤画



獅子の子落とし（瑞泉寺式台門）
北村屋七左衛門作



福祿寿 木村立獄画



虎 佐伯岸駒画



丸山焼赤絵壺



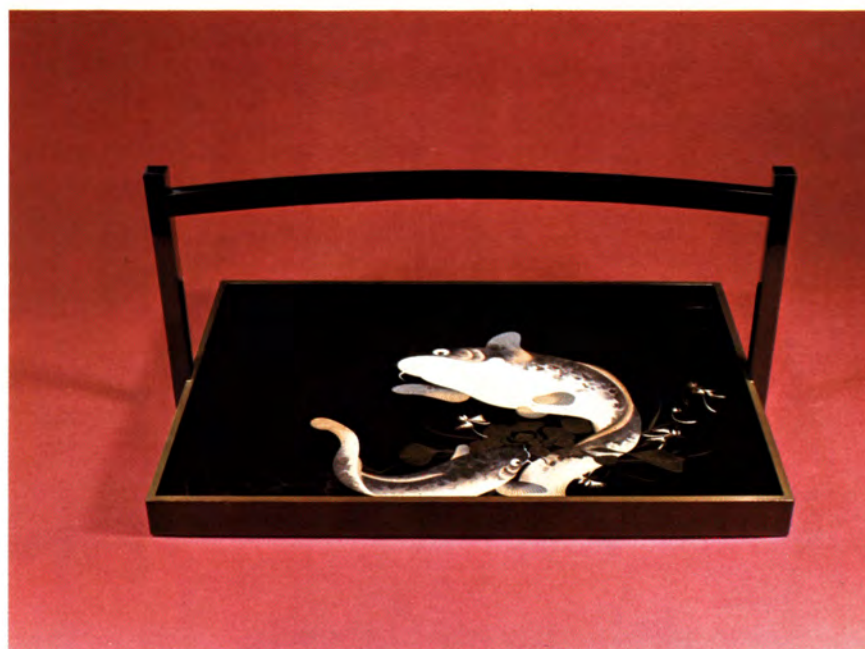
小杉焼鴨徳利



越中瀬戸焼香炉
延宝6年(1678)
の銘がある



鉄製鱈口(福野町安居寺) 高岡鑄物師
の作で 万治2年(1659)の銘がある



治五右衛門塗 白漆鯉鷺草盃盆
治五右衛門は城端の塗師である

庶民生活さまざま

庶民の生活の慣習は、祭りや年中行事に残っている場合があり、この行事を通じて江戸時代の庶民生活の一端を知ることができる。とくに祭りは庶民のエネルギーを発散する場として、重要な行事であった。高岡・八尾・城端・富山などの曳山祭はその代表的なものである。この他鶴坂神社(婦中町鶴坂)の尻たたき祭り、加茂社(下村)の流鏝馬(やんさんま)、熊野神社(婦中町中名)の稚児舞など吉凶占いや祈願のための祭りにも庶民生活の様子がかがえる。

また人びとは寺社の境内で興行される芝居・軽業・あやつり人形や、五箇山の「こきりこ」に代表される民謡にも楽しみを求めている。

一方多くの暴れ川をもつ越中ではたびかさなる洪水に苦しめられ、人びとは治山治水に力をつくし、飢饉に備えて備荒倉なども設けた。



入善のからくり人形



こきりこ踊の図



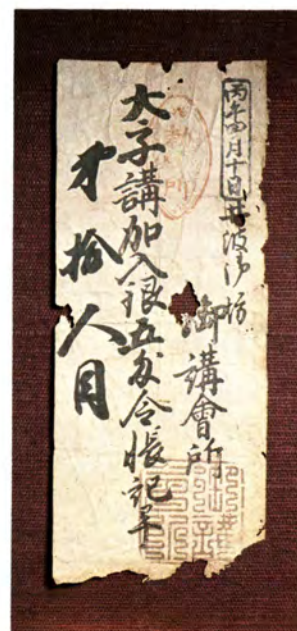
高岡の曳山



八尾の曳山



鶺鴒阪神社尻たたきの図 尻たたきの行事には多産や安産の願いがこめられていた



太子講札 太子信仰は仏教の宗派を問わず 広く庶民の間にひろまった



立山道標地蔵 (富山市旭町)



備荒倉の扁額



大鷲山くずれの絵図 安政5年(1858) 大鷲山の崩壊がもとでおこった鉄砲水のため 大きな被害がでた

近代

戊辰戦争

鳥羽伏見の戦いは、徳川家に決定的な打撃を与え、維新の方向を決定した。徳川慶喜は朝敵とされてその追討が命ぜられ、内政・外交とも天皇みずから行なうという王政復古の詔書が出された。

これに対し、慶喜は恭順の意を表わし、江戸城も明けわたされたが、東北地方の諸藩はこれに満足せず、政府軍と奥羽越列藩同盟軍との戦いとなった。

新政府側についた加賀藩・富山藩は、朝廷への忠勤を示すためもあって、藩の精鋭をすぐって越後に進発させた。両藩の目標となったのは長岡で、苦戦の末、明治元年7月29日長岡城を陥れた。この戦いは、全軍の戦局を左右する重大なものであり、また両藩はこの戦争の軍需基地として重要な役目を果たした。



長岡攻めの図

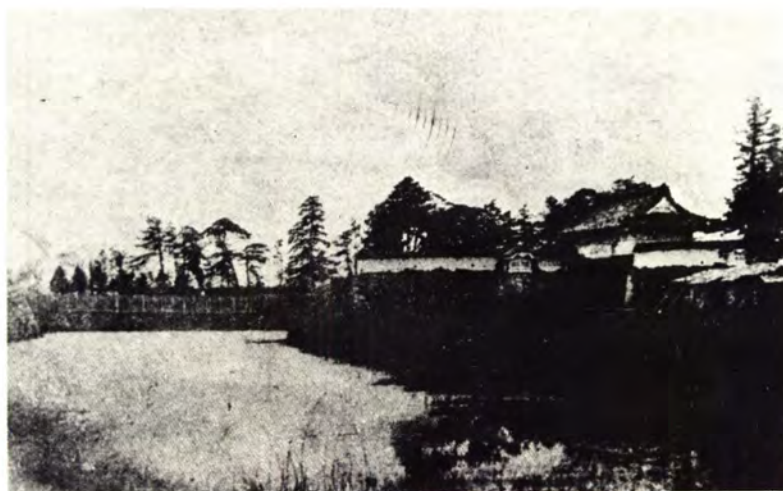
藩から県へ

明治2年、^{はんせきほうかん}版籍奉還によって、土地人民は朝廷へ返された。ついでいろいろの改革が行なわれたが、藩主はそのまま知藩事となり政治の実際はあまり変わらなかった。

明治4年、^{はいはんちけん}廃藩置県が行なわれた。中央政府から役人が派遣され、知藩事となっていた大名が東京へ呼びかえされた。ここにはじめて新しい県政がはじまった。このとき誕生したのが新川県である。

県庁は初め魚津に置かれたが、まもなく富山へ移された。当時は県政の過渡期で、いろいろな変遷があった。たとえば明治9年に加賀と合併し、石川県となったりした。

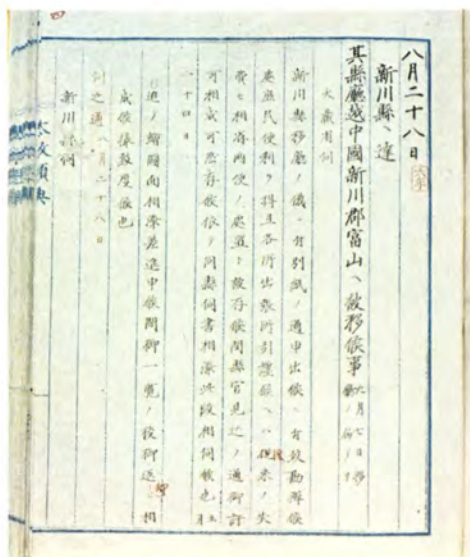
町や村でも、明治3年^{とむら}十村や肝煎が廃止され、あらたに^{さむらい}里正が任命されたが、まもなく区長となり戸長とかわった。その度ごとに町や村の行政区画が転々とかわり、行政の方針も明治22年の市町村制の施行のころまでは確立しなかった。



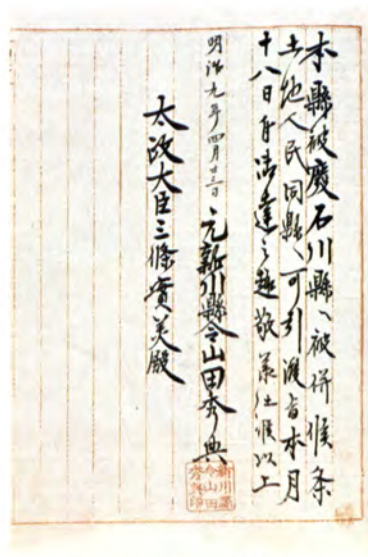
維新当時の富山城二階御門



明治4年にできた新川県の県庁
むかし魚津の郡代役所であった



明治6年8月になって 新川県
庁はもとの富山城本丸御殿に移
された



明治9年新川県を廃止して
石川県に合併した時の文書



明治時代になっ
て作られた藩印



同 県 印



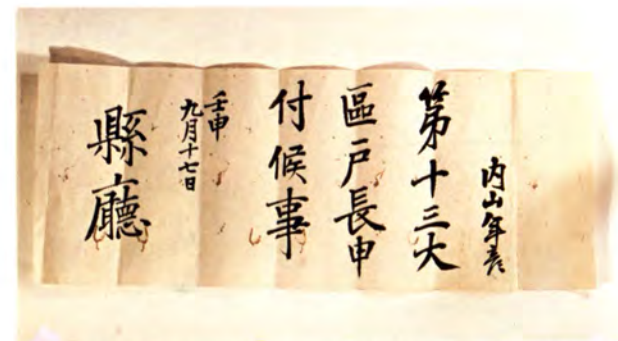
同 上



同 上



明治3年の里正（今の町村長にあたる）任命書



明治5年の戸長（今の町村長にあたる）任命書

学制発布

明治の新政府は、明治5年「学制」を発布した。「学制」は、わが国に教育制度を設けるための最初の法令であった。

「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」と国民皆学の構想が高らかにうたわれた。

「学制発布」を受けて本県は、明治6年1月県庁に学務係を設け、知事が先頭に立って小学校の開校をすすめた。しかし当初は、学校を開くための費用はすべて地元の町村の負担とされ、また、人々も西洋式の教育の内容になじむことができなかつたため、学校の開設と維持には大きな困難がともなった。

本県で最初に設けられたのは伏木小学校であった。その地の先覚者藤井能三の尽力によるものであって、文明開化の教育を行なうために、「学問のススメ」で有名な福沢諭吉の弟子、吉田五十穂を校長に招くほど熱心にすすめられた。

このような努力が県内の各地でも続けられ、明治7年には364校の小学校が誕生するまでに教育が普及していった。



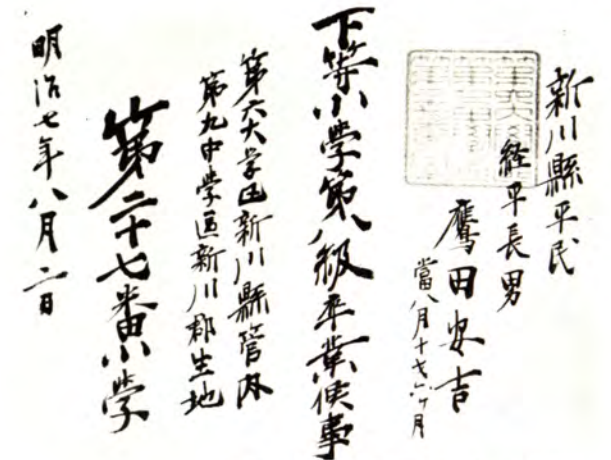
明治8年 藤井能三の尽力によって建築された 伏木小学校



明治20年 建築された泊育英小学校
現存のものとしてはもっとも古い



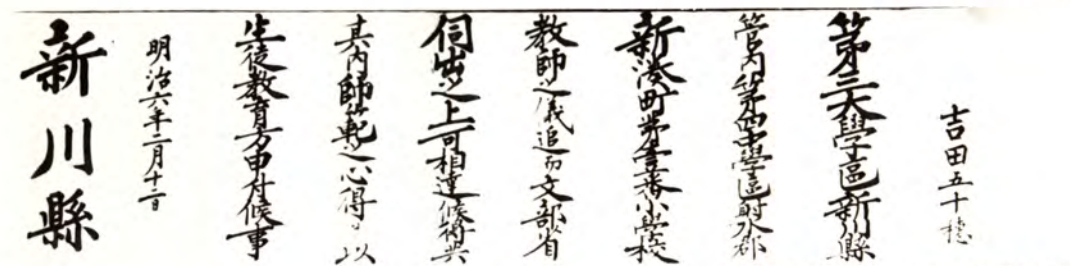
明治の郷土読本



明治7年の卒業証書（今の黒部市）



藤井能三の小学校寄付を聞き届けた文書



本県ではじめての 教員辞令

地租改正と砺波騒動

新政府は、明治4年に土地の制度と税制を改めた。それ以来、土地の所有ができるようになり、明治5年から地券が発行された。また、租税は米納から金納に改められ、地価に対して100分の3が税金として定められた。同6年には、改正実施のための規則や心得書が太政官役所から布告され、新川県でもこれにしたがつて、関係指令を各町村に出して調査を開始した。しかし農民側では、江戸時代よりもかえって税が高くなったとして反対する者もあり、さらに同9年には稲が不作であったため、全国各地に農民の騒動が起こった。

砺波地方でも重共与三左衛門ら農民が激しく反対して団結し、同10年の2月7日戸出町永安寺の集会で役人を襲って大けがをさせたり、金持の家をこわしたりして暴動をおこした。

政府の方でも、税金の割合を初めの100分の3から、100分の2.5に下げたのと、その差額の0.5についても話し合いをして農民の不満をやわらげた。小作権についても、しだいに認めるようになった。



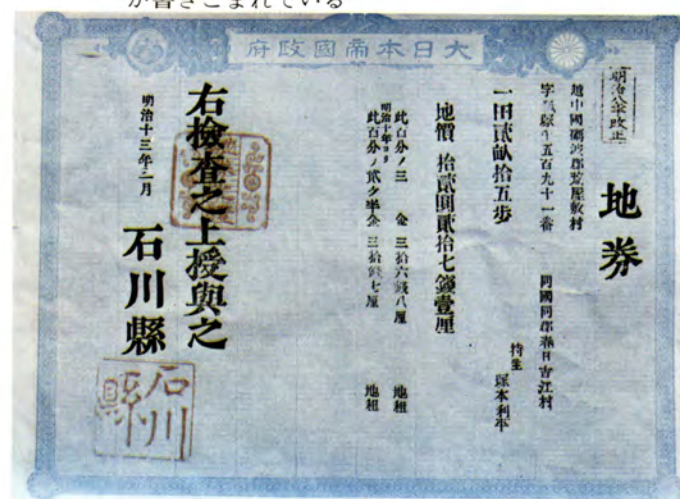
土地は一筆ごとに その地価などが書き上げられた（今の魚津市長引野）



書上帳には反別 収穫米 地価 地租が書きこまれている



地租改正の際 詳細に書き上げられた地図（今の魚津市長引野）



地租の徴収と土地所有の確認のため 明治5年から発行された地券



砺波騒動の際 農民が押しかけた永安寺の門（高岡市戸出）



押しかけた農民は 柱の至るところにきずをつけて 役人を脅迫した

明治天皇の北陸巡幸

明治維新になって、天皇を中心とする新しい政治が発足したが、人びとには急になじめないものがあった。

そこで、政府は天皇を敬わせ、その下に民心の安定をはかるため、明治天皇の全国巡幸を行なうこととした。北陸地方へは明治11年秋に巡幸され、天皇は9月28日新潟県から富山県へはいられた。その日は泊町に御宿泊。つぎの日は魚津に、3日目は富山に、4日目は高岡を経て今石動にお泊りになった。翌10月2日県境の天田峠を越えて石川県へ向かわれた。

行列は総勢 815人。馬上の近衛兵が先頭に立ち、天皇の2頭立ての馬車を中心に、高官たちの馬車・人力車が連なった。そして前後を多数の県官・警察官に守られて進む光景は、県民に新しい時代の来たことを印象づけた。なおこのときに呉羽新道・加越国境を結ぶ天田峠越えの新道が開かれて、交通・通信の整備がはかられた。



明治天皇北陸巡幸絵巻



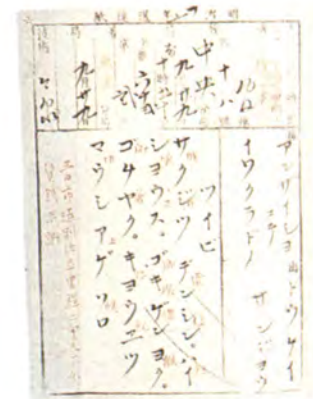
富山での行在所であった 中田清兵衛邸



天皇巡幸のときあらたに作られた
天田越え（今の小矢部市五間橋）



御巡幸錦絵



天皇の到着を知らせる電文

自由民権運動

越中の自由民権運動を啓蒙したのは、射水郡老田村（今の富山市中老田）の海内果であった。彼は明治10年から東京日日新聞の論説を担当しながら小杉町の相益社に寄稿し新しい思想の普及につとめた。

おなじ射水郡棚田村の稲垣示は、土佐の板垣退助らの自由民権の主張に呼応して県内各地に政談演説会を開き、明治13年、富山・石川の地域を代表して政府に国会開設の請願を提出した。このことから「越中の自由は射水から」といわれた。

明治15年、稲垣らは自由党系の北立自由党を、富山の横山隆道らは越中自治党を、さらに般若野村（今の高岡市）の島田孝之らが越中改進黨を結成した。

自由党は翌16年に高岡市瑞龍寺において北陸有志大懇談会を開き、九州・四国など全国各地から有志を集めて民権運動の氣勢をあげた。

稲垣や島田に共鳴する青年有志は、各町村の教養ある地主層らに多かった。

明治18年になって、大井憲太郎・稲垣示らが韓国民に独立と自由を与えることを目的として、暴動を起す計画をたてた。しかし事前に発覚し、自由黨員58名が告訴されたがそのうち県人は11名もあった。これを大阪事件という。



海内果の生家（富山市中老田）



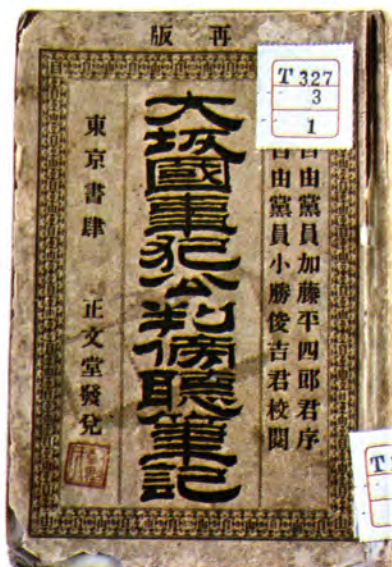
明治15年稲垣示が中心となって金沢で発行した 自由新誌



北立自由党の指導者 稲垣示



越中改進黨の指導者 島田孝之



大阪国事犯公判傍聴筆記



同公判廷之図

明治の新聞雑誌

明治10年、小杉の^{かいち}開智堂から発行された相益社の「相益社談」は、越中新聞・雑誌のさきがけとなり、その後、自由党・改進黨の政党組織ができるにしたがって、おのおの政党の特色をもつ機関紙が発行されるようになった。

明治15年、^{いながきのすけ}稲垣示は北立自由党から「北陸日報」を金沢で発行、のち「自由新誌」と名を改めた。1部20ページぐらいのパンフレット形式のものである。これと類似したものとして、明治14年発行の改進黨系の「越中新誌」があった。

大阪事件で入獄していた稲垣は明治22年獄を出て、大同派の「北陸公論」を発刊し、明治17年に創刊された改進黨系の「中越新聞」とともに当時の報道 言論の二大勢力をなした。後にそれぞれ「富山日報」・「北陸政論」(後の「北陸政報」)となり、しだいに県民の中に浸透していった。

このほか明治初年から、文学(詩文)・商業などの小団体ごとに文芸雑誌、商況雑誌が刊行されていた。



明治10年 小杉で発行された 相益社談



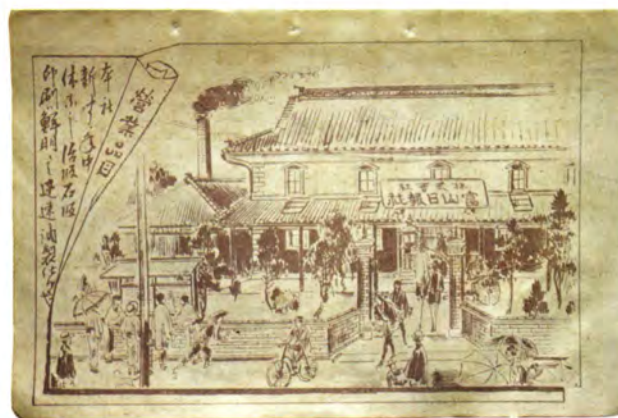
明治18年から島田孝之らが中心になって発行した 北辰雑誌



明治17年から発行された中越新聞 (改進黨系)



明治25年から発行された北陸政論 (自由党系)



富山日報社屋 中越新聞は明治21年富山日報と改題された



明治初めごろの こうもりがさ
をもったチョンマゲ姿の男



婦人束髪之図



郵便制度がはじまったころの
はさみ箱



台ランプ



台ランプ



吊ランプ



台ランプ

文明開化あれこれ

明治維新となり、新しい政治のもとに欧米の文明が輸入され、国民の日常生活にもいろいろな移り変わりがあらわれた。明治3年、高岡木舟町に県下最初の郵便役所が置かれ、手紙を集める箱や切手を売りさばくところが設けられた。ついで5年、泊・富山・魚津・滑川・岩瀬・水橋・今石動・氷見・出町・井波・城端に郵便局が開かれた。同11年、明治天皇巡幸道路に沿ってはじめて電信線がかけられ魚津に電信局ができた。12年には高岡・伏木・富山にも分局が開かれた。

明治6年には暦についての改革も行なわれ、太陰(月)をもとにした古い暦が太陽をもとにした今日の暦に改められた。また、西洋医学をとり入れ、天然痘予防の種痘を行なって大きな成果をあげた。病院も各地に設けられて医療が普及した。

このほか、4年にちょんまげが断髪に改められ、6年にキリスト教の禁制が解かれた。さらにランプ・時計・寒暖計の使用、写真撮影、洋服着用牛肉を食べ牛乳を飲むことなどもこのころからはじまり、文明開化の波が県民の生活をしだいに変えていった。

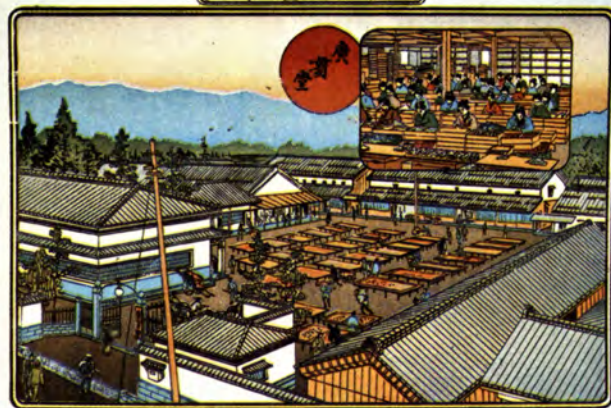
殖産興業

新政府が大きく掲げた旗じるしは、富国強兵と殖産興業であった。まず明治初期に官営模範工場などをつくり、近代産業の移入につとめた。

富山県においても特に力をいれたのは茶の栽培・養蚕・製糸・稲作改良などであった。とくに輸出の上で重要であった生糸の生産改良をおおいに奨励した。明治6年、福光に新川県生糸改会社を設立し、今石動・八尾に出会社を置いたのもそのためであった。福光では、先覚者中邨林造・石崎和善らによって県下にさきがけて機械製糸工場が創設され、ついで蒸気機関による動力機械の製糸に切り替えられた。

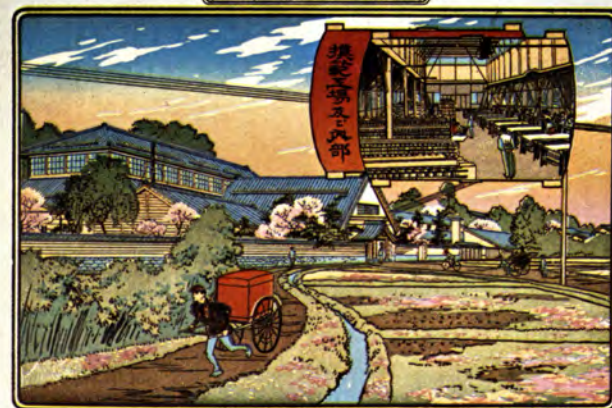
また、越中売薬も広貫堂をはじめ上市・滑川・中田・小杉などに製薬会社が設立され、国内、国外に進出した。ほかに、織物業も発展した。高岡銅器の生産も伸び、日本一の名声を得られるようになった。

所名山産



明治9年設立の広貫堂

所名山産



明治35年設立された 富山県織物模範工場



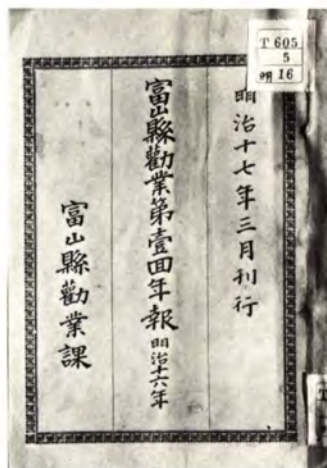
明治5年のオーストリア博らん会の報告書



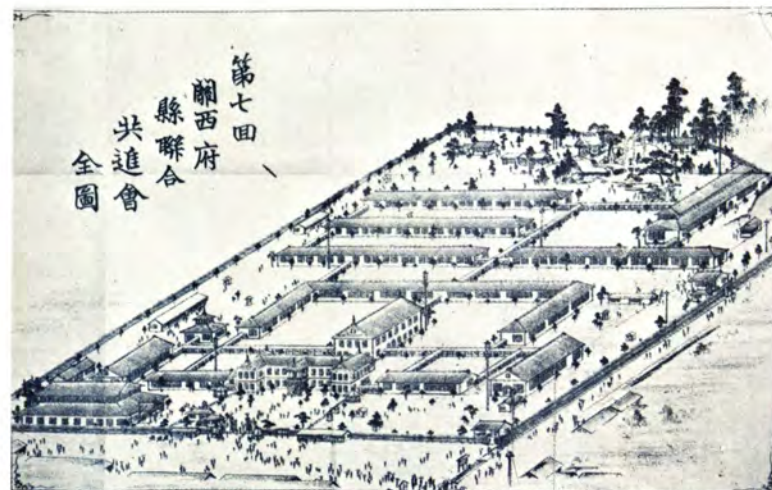
右の報告書の内容 高岡から銅器が出品されている



明治26年に創立された 高岡紡績株式会社



明治17年から発行された富山県勸業年報



明治33年 現在の県立富山高校の敷地を中心に開かれた 第7回関西府県連合共進会会場 こうした催しが 当時の商工業の発展に大いに貢献した

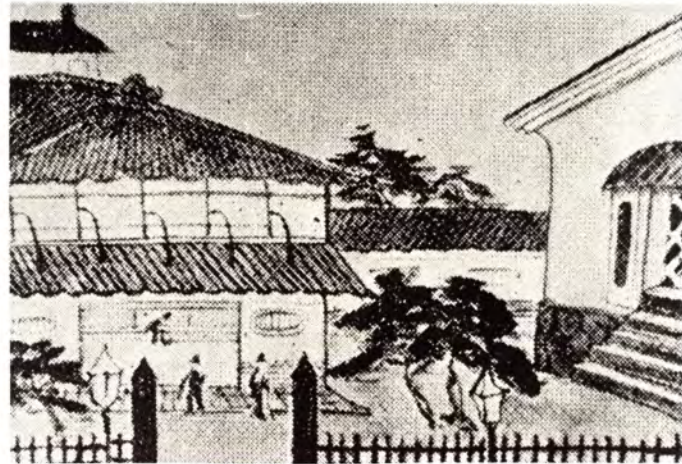
銀行の設立

明治12年、県下最初の銀行として、富山市に第百二十三国立銀行が設立された。これは金禄公債や大商人・地主などの資本をもとにして、つくられたものである。なおこれより先、明治10年には、金沢に第十二国立銀行が設立され、明治10年代には貸金会社がたくさんできて、殖産興業に大きい役割を果たした。

明治30年前後には、県内に中小銀行が数十行も設立され、本県産業のぼっ興に金融面から貢献した。しかし景気の変動による盛衰が多く、明治17年には第百二十三銀行と第十二銀行とが合併して第十二銀行となり、富山に本店が置かれた。これが今の北陸銀行の前身である。



明治10年設立された第十二国立銀行本店
昭和18年高岡銀行・中越銀行・富山銀行
を統合して 今日北陸銀行になった



明治12年創立された 第百二十三国立銀行本店



明治22年設立の高岡銀行本店



第百二十三国立銀行が発行した紙幣



明治28年設立の中越銀行本店



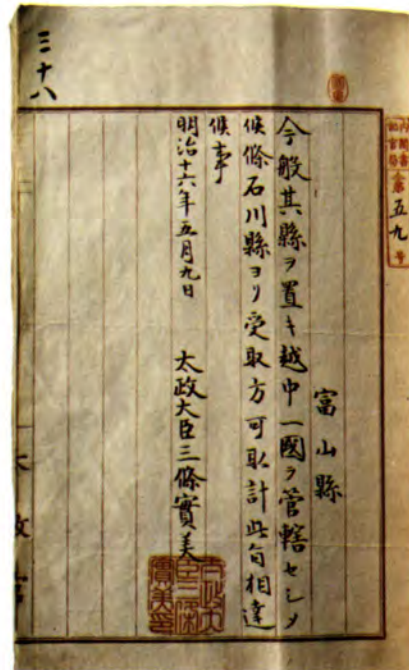
明治29年設立の富山銀行本店

富山県の成立

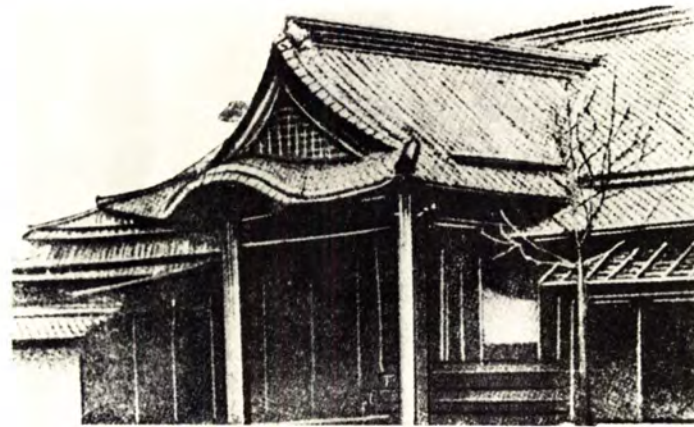
明治9年に新川県が石川県に合併した。当時の石川県は今の福井県の一部と富山県をもあわせたもので、県政を行なううえでしばしば意見の対立があり、明治14年には福井県が分県独立してしまった。

越中は独立した地区をなしており、県庁のある金沢へ行くには遠くていろいろ不便な点が多かった。人情・風俗などにも違いが多く、それが明治14年ごろから県議会の土木費のことなどでしだいに対立が表面化してきた。加賀は県政を行なうにあたって道路や官庁の建設を主張したのに対し、越中は洪水を防ぐための堤防の築造をとなえるといった状態であった。対立はしだいに深刻になり、明治15年には越中側有志が集まって分県請願の決議をするほどになった。それには藩政時代からの加賀藩の圧迫に対する反ばつもあった。分県運動達成にあたって、米沢紋三郎を委員長に入江直友を副委員長として上京させ、内務卿山田顯義へ分県建白書を提出し、あわせて三条実美や岩倉具美へも強く請願し、分県運動を強力に展開した。

越中だけでも人口68万、耕作面積9万町歩、地租84万円もあり、独立能力じゅうぶん



富山県設置をきめた太政官布告



明治32年焼失の旧富山県庁



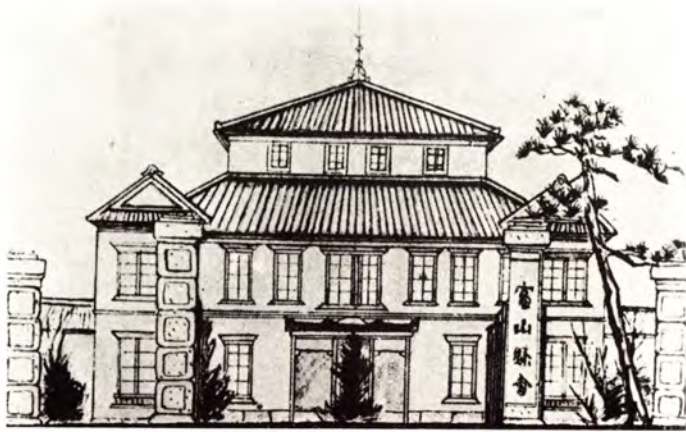
分県陳情のために上京した人々



初代県令（今の知事）国重正文



富山県印



最初の県会議事堂 明治20年に県庁の門前に塀を隔てて建てられた



明治33年にできた富山県庁（富山城址）



明治42年 皇太子（のちの大正天皇）行啓を機会に 県庁構内に建てられた県会議事堂



西砺波郡役所 当時の郡は今日の地方公共団体に 匹敵する権限をもっていた（今の小矢部市城山町）

かつ地理的にもまとまっていると主張した。新政府はこの事情を認めて、明治16年5月9日、太政官布告15号で「富山県ヲ置キ越中国一円ヲ管轄ス………」と定めた。初代県令として国重正文くにしげまさふみが赴任した。県庁舎は旧城址の旧藩邸があてられ、当時の予算は37万円であった。これが今日の富山県のはじまりである。

県議会は分県と同時に石川県議会をはなれ、新たに22名の新議員が選出され、16年8月に富山師範学校で第1回の県議会を開いた。議長には武部尚志たけべしやうしが選ばれた。

県令や告示などを一般に知らせる富山県報は、はじめ新聞に公表されていたが、やがて明治22年から県単独で発行するようになった。

こうして、変せんを重ねた県の行政区画もようやく確定し、県政の基礎がかたまった。

富山県となるまで

		江戸時代	明治2年 7月17日	明治4年 6月14日	明治4年 11月20日	明治5年 9月27日	明治9年 4月18日	明治16年 5月9日
加賀国	能登国	加賀藩	金沢藩	金沢県	金沢県	石川県	石川県	石川県
射水郡					七尾県			
越中国	砺波郡	富山藩	富山藩	富山県	新川県	新川県	石川県	富山県
	新川郡							
	婦負郡							

富山県成立までの経過

道路・橋の整備

本県の近代化の第一歩としてまず着手されたのは、交通の整備であった。

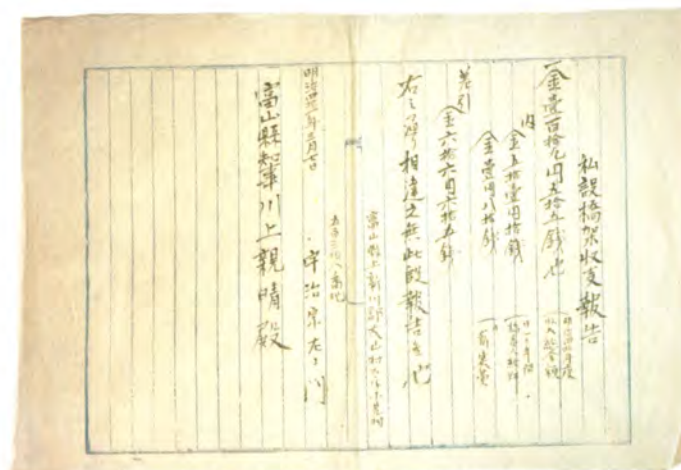
廃藩置県と同時に行政当局は国道(北陸道)の整備に着手し、ついで、飛騨街道、金沢福光街道を整備した。明治9年には、道路は国道・県道・^{りどう}里道に分けられ、それぞれの管かつにしたがって改修、新設をすすめていった。とくに苦勞をしたのは、全国一の暴れ川といわれた諸河川に橋をかけることであった。維新のころは県下の橋は神通川舟橋や愛本橋だけであったが、官民協力して諸河川につきつぎと橋がかけられていった。なかでも黒部・常願寺・神通・庄川はとくに困難をきわめ、一般民衆の寄付を求め国の補助を嘆願し、数年を要して一つ一つの橋を作っていた。明治16年の石川県からの分界の焦点も土木費の問題であった。また、町村や個人でかけた^{ちんとりばし}賃取橋もあった。



明治38年にできた神通大橋



明治31年にできた黒部川橋



大山町小見にかけられた私設賃取橋の収支報告



明治43年ごろできた 福光大橋



明治天皇御巡幸のときにできた
安養坊道(今の富山市安養坊)



藩政時代からのブリ台網



明治40年ころになって改良された上野式大敷網によって ブリの漁獲は更に増加した



新湊市沖でのイワシの大漁



大漁旗をあげて帰港する舟（魚津港）



氷見沖の漁場の図（明治のはじめ）

漁業の発達

明治のはじめのころの漁法は、大敷網・地曳網・釣など藩政時代とほとんど変わらなかった。しかし、明治34年に漁業法が出たころからしだいに進歩し、ぶり・いわし・まぐろ等の定置網漁業が盛んになった。その中でも氷見で発明された上野式大敷網が有名でたちまち全国にひろがった。県内の漁場では氷見・新湊・魚津などに多かった

このころから漁業組合が増加し、また、網の材料がわから綿糸・マニラ麻へと改められ、船の動力化・大型化が進み、これにあわせて新湊・氷見・魚津などで漁港がつけられた。

さらにこのころから沖合漁業へ進出するようになり、日本海での操業がふえ、その上内地沿岸各地や北海道以北へも出漁し、にしん・さけ・ます漁業などがふえてきた。

遠洋漁業としては、明治の中ごろから千島・樺太・朝鮮・北洋へと出漁し、さけ・ます・かになどを追うようになっていった。

災害の頻発

明治・大正のころは洪水・火災などの災害や凶作が非常に多く、人々はそのつど苦しんだ。県内の川の多くは暴れ川でじゅうぶんな堤防がなくしばしば洪水に見舞われた。なかでも明治28年、大正3年の神通川洪水や明治29年の庄川氾濫は5000戸から1万戸もの浸水家屋を出した。

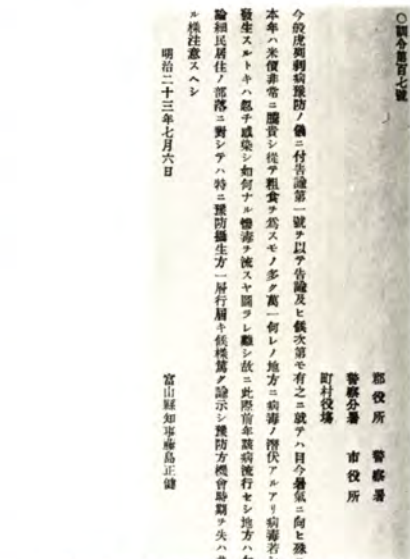
また大火による損害も多くとくに明治18年・32年の富山の大火(焼失約5000戸)や明治33年の高岡の大火(焼失約5000戸)は大きな災害をもたらした。

伝染病の流行もしばしば起こった。とくにコレラは明治12年には死亡者1万2000人、明治19年には死亡者1万1000人などを出し、コレリ病とよんで恐れられた。抱瘡・赤痢などの流行にもしばしば悩まされたが、伝染病患者を収容した避病院や一般の病院の設備の充実につれて少なくなっていた。

凶作も天候まかせて防ぎようがなく、そのたびごとに農民は飢えに苦しみ、多くの人達が北海道などへ移住していった。たとえば明治30年はうんか(稲の害虫)年と呼ばれ、減収50万石にも達し、農民を苦しめた。



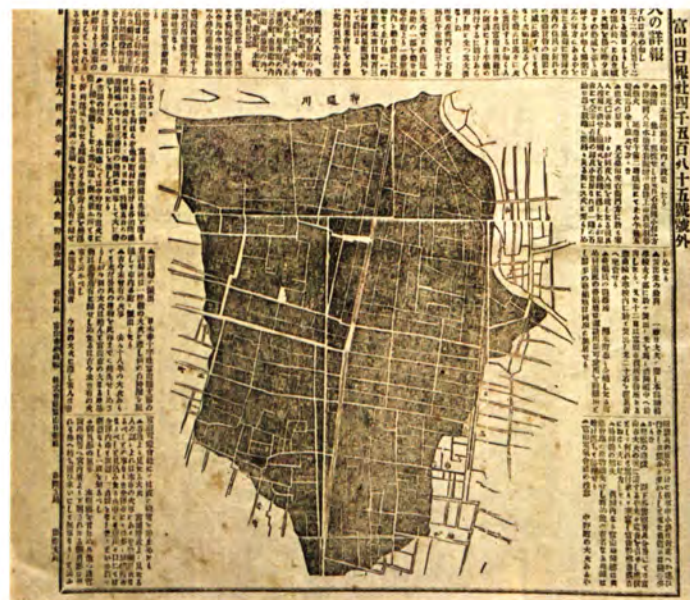
明治29年8月 富山市を襲った大洪水を報ずる富山日報



コレラ予防について注意する訓令 当時こうしたものがしばしば出された(明治32年)



昭和9年7月 富山県を襲った大豪雨で氾濫した黒部川のため 砂れき地と化した村椿村(今の黒部市)



富山市の3分の2を焼失した 明治32年8月の富山火災を報ずる富山日報号外



明治33年6月の高岡大火を報ずる 北陸政論の記事 市内の中心部を焼き払った



同じく庄川の大洪水で被害を受けた浅井村(今の大門町)

移りゆく農村



明治35年耕地整理を行ない 家々も集団移転して整理した 大家庄村（今の朝日町）



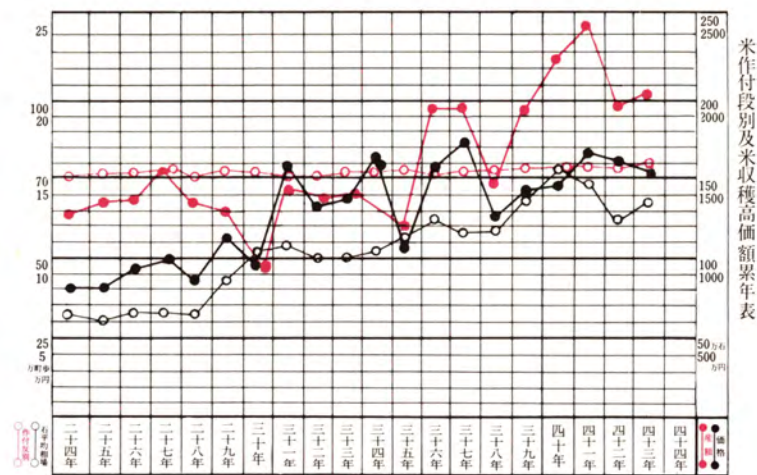
明治40年「銀坊主」を発見した 石黒岩次郎の碑（今の富山市野口）



明治末ごろの旧寒江村における馬による田地耕作風景（今の富山市）



昭和のはじめごろできた 黒部川合口用水



稲の耕地面積・收穫高・価格の年次別変化

本県の農業の中心は米作であった。明治の前半には米作を中心とした新しい農業技術の紹介がおこなわれ、他方養蚕や茶の栽培なども奨励された。さらに明治の後半から農地の整備が進み、大家庄村（今の朝日町）・大沢野町などのほか、神通川・庄川・黒部川等の洪水跡の耕地整理、射水の湿地帯の乾田化がおこなわれた。また、大河川には合口用水を作って水路を改修し用水の確保につとめた。

品種改良にも力を注ぎ、銀坊主・大正糯・新石白・農林一号などつぎつぎと新品種が作られていった。肥料も草・藁・魚肥から硫酸・過磷酸石灰等の化学肥料へと進歩した。馬耕が奨励され、農具も機械化し足踏式脱穀機・螺旋水車などが普及した。

一方、黒部西瓜やチューリップなどの換金作物の栽培や酪農も進められ、農業経営においては農会や産業組合が指導的な役割を果たした。

こうして、米の収量もしいに増加し、明治16年置県当時反(10アール)当り1石2斗7升3合総收穫高127万石であったが、昭和12年には反当たり2石3斗1升総收穫高184万石にも及んだ。

北海道移住

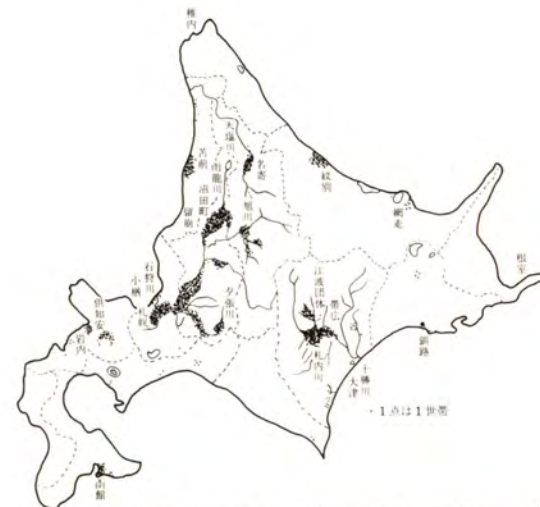
明治のころは県民の大部分が農業に従事していたが、なかには耕作面積が少なく小作者として苦しい生活を送っている農民も多かった。そこでついには村をすて他郷に新天地を求め人びとも出てきた。この人びとに大きな希望を与えたのは広大な原始林をひかえた北海道の開拓であった。

本県からの移住者は、昭和9年までに2万5391世帯6万760人にも達し、北陸4県の中で最も多かった。なかでも移住者の多かったのは、明治30年と40年の日清・日露戦争後の不景気に加えて飢饉のあった年で、両年ともそれぞれ移住者は1万人にも達した。かれらは道内各地に単独移住または集団移住を行ない、きびしい寒さの中で原始林を切り開き、つぎつぎに村作りを行なっていった。なかでも砺波団体・江波団体・新川団体などが有名である。沼田喜三郎の努力による雨龍本願寺農場、大矢四郎兵衛の大矢農場なども特筆すべきものであろう。

北海道以外の関東や海外各地に新天地を求めて、雄飛した人びともすくなくなかった



開こん風景



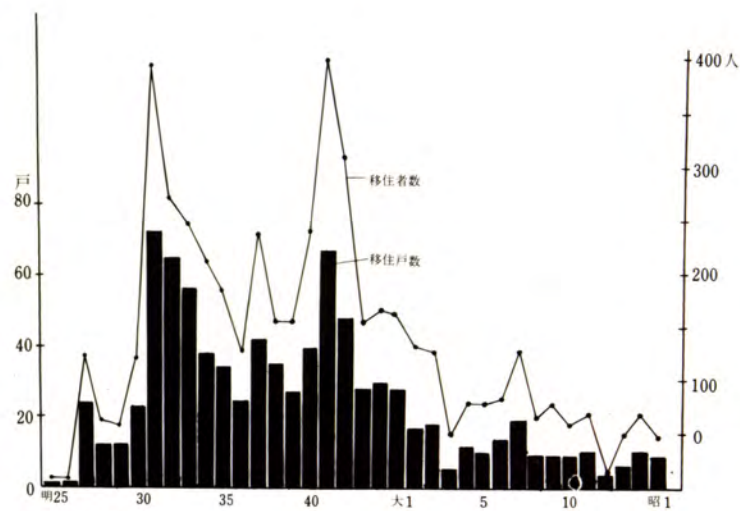
砺波市より北海道へ入植した人々の分布図
(砺波市史)



小屋掛けする農民



北海道へのむしろの積出し(魚津港)



註、砺波市役所除籍簿による

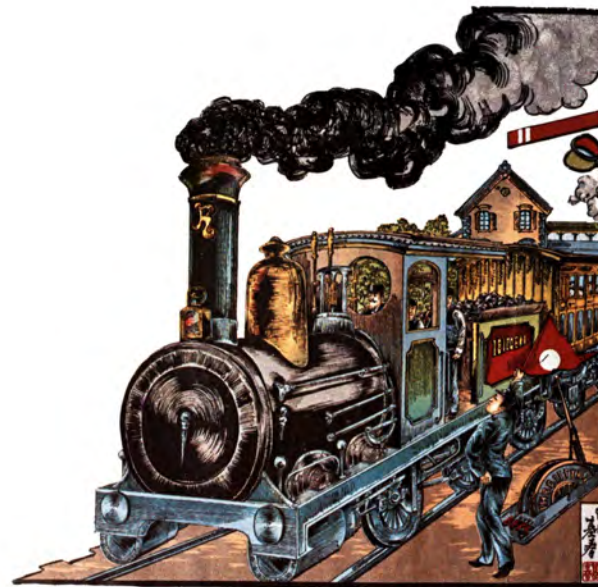
砺波からの北海道への移住者の推移
(砺波市史)

中越鉄道と北陸線

日本に初めて鉄道ができたのは明治5年であった。北陸でも鉄道開通を望む声が大きくなり、明治14年資本を出し合い、民間からも資金を募り東北鉄道敷設の計画が立てられた。しかし、間もなく中止となった。

明治25年、帝国議会において、国有鉄道の一つとして北陸線敷設が指定された。そして同26年8月には敦賀から工事着手、31年に高岡まで、32年に富山まで開通するに至った。同15年にはすでに滋賀県の長浜から敦賀まで開通しており、大正2年4月に直江津まで竣工し、全線が完成したのである。

なお、これより先砺波地方では鷹栖村(今の砺波市)の大矢四郎兵衛らが中心となって中越鉄道株式会社が開設され北陸線が高岡・富山まで通ずる以前の明治30年5月、高岡市の郊外の黒田と福野間に汽車が走った。これが富山県最初の鉄道の開通である。



明治30年砺波の野を走った弁けい号の絵図

中越鉄道汽車
開業廣告
當會社鐵道高岡(黒田)
ヨリ福野マテ十哩四
分ノニ來ル四日ヨリ
營業開始ス
但黒田ハ午前六時ヨ
リ午後七時マテ福野
ハ午前七時ヨリ午後
八時マテ一日ニ七回
發着其他數次ノ臨時
列車ヲ發着セシム
富山縣高岡市
中越鐵道株式會社

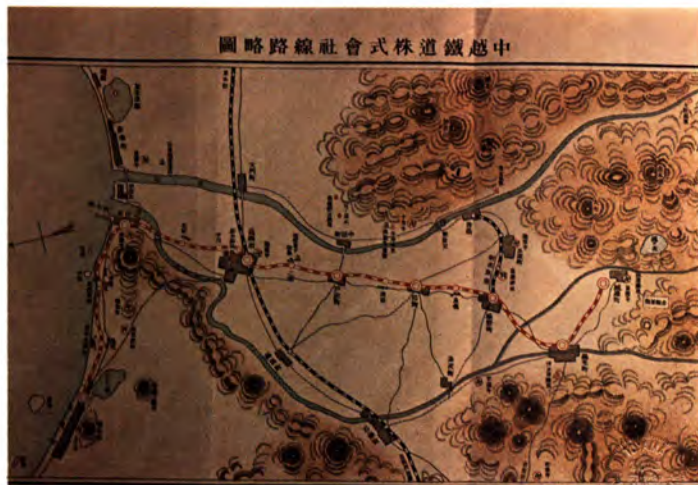
中越鉄道汽車開業廣告



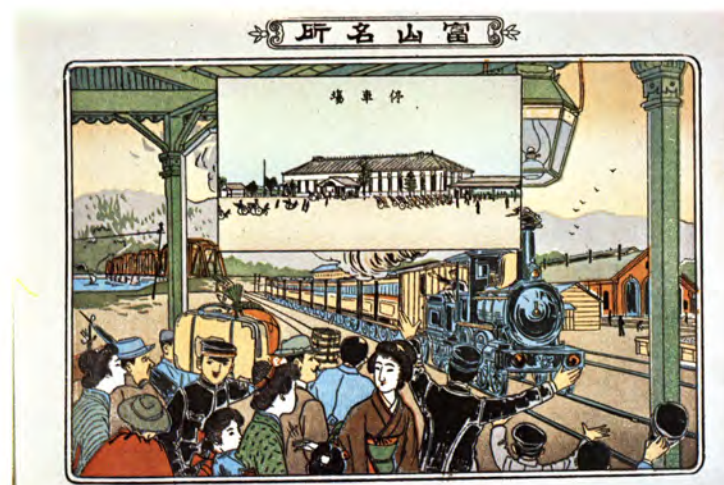
明治31年10月 小矢部川鉄橋が開通したときのようす



明治32年 北陸線の開通を報ずる富山日報の記事



中越鐵道株式會社路線略圖



富山停車場 明治41年田刈屋から現在の場所へ移転した 当時北陸線中 もっとも新式の構造であった

伏木港と 東岩瀬(富山)港

明治にはいって物資の交易がしだいに大規模になると、良港の条件にめぐまれた伏木や東岩瀬(富山)の港がそれぞれ高岡や富山を後背地として大きく発展してきた。しかし汽船が入港するようになると従来の伏木港や東岩瀬港では十分その機能を果たせなくなった。そこで伏木港においては、^{よじいのうきう}藤井能三らが尽力して港を改修し、明治22年には特別輸出港に指定された。明治末年、庄川を分流させてからは本県の中心的貿易港として発展して、高岡・伏木工業地帯発展の原動力となった。

東岩瀬港は、馬場道久らの努力によって大正のころからしだいに近代的な港に修築され、神通川口と切りはなして港を築き、富山の外港として発展し、富山工業地帯形成の基盤となった。



伏木港の発展に尽くした
藤井能三



明治10年に完成した伏木燈台 富山県ではじめての洋式燈台である



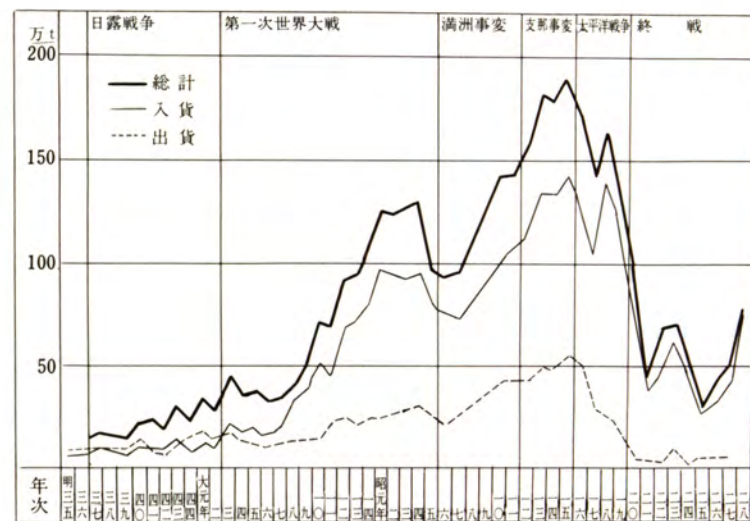
大正2年の伏木港 帆船と蒸汽船が混在している



大正初期の東岩瀬港



新湊の南島間作の持船 奈古浦丸 明治37年ロシアの軍艦によって沈められた



伏木港における貨物の出入

日清・日露戦争と県民

明治27年、日本は清国しんこくと戦い、翌年勝利を博した。この戦いの前後からわが国の産業経済は大きく進展した。同29年には、軍備拡張にともない金沢に第9師団が置かれた。

明治37年、日本はロシアと衝突し、満州で激戦をくりひろげた。郷土の第9師団も旅順で死闘をくりかえし、多くの戦死者を出した。

明治40年には、富山に第9師団の第69連隊が今の富山大学の場所に新設された。しかし、大正14年には69連隊が廃止されて金沢から35連隊が移ってきた。

これらの戦争を通じて、県民は留守家族を守り銃後の生活を支えてきた。小矢部市の婦人、宮のさの軍人慰問活動などはその一例である。

また、戦没軍人はそのつど靖国神社にまつられた。富山の招魂社しょうこんしゃも大正2年にできあがり、昭和14年には護国神社ごこくと改称された。



平壤夜戦我が兵勝利の図（日清戦争）



日露戦争従軍章



203 高地奪取 旅順港攻略のきめ手となったこの戦いに 多くの県人の血が流された



多田海造氏とその征露陣中日記 同氏は大門町の出身で 近衛兵として従軍したが 従軍の記録をこと細かに記録していた



遼陽陥落を祝う 高岡市内小学校生徒（明治37年9月5日高岡市古城公園）



明治40年に設けられた 歩兵第69連隊（今の富山市五福）

電源開発と近代工業の発達

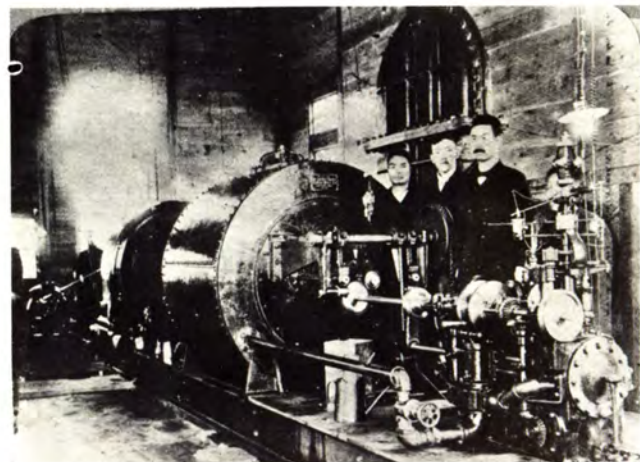
長い間たび重なる水害に苦しめられてきた県民が、逆に電力資源として水を利用しはじめたのは、明治32年のことであった。神通川から取水している大久保用水の落差に注目して、アメリカ製の新式発電機で電燈用電気をおこし、富山市へ送電したのは富山電燈会社の青年技師^{らくき}密田孝吉であった。

その後、日露戦争の復況の波^{いかり}にのって、神通川上流の庵谷^{いかり}で本格的な電源開発が始まった。その電力は輸送の便に恵まれた伏木港背後の工業地域へ送られ、第一次世界大戦中から戦後にかけて飛躍した工業のエネルギー源として活用された。この地域には大正6年に電気製鉄（現在の日本鋼管）・同7年に北海電化（現在の日本重化学工業）・北海曹達（現在の東亜合成）同8年に北海工業（現在の十条製紙）などがつぎつぎと設立された。

やがて、この豊富な電源地帯は中央の実業家の注目するところとなり、本県出身の浅野総一郎がまず大正8年に庄川水力電気会社を設立して小牧ダムの建設に着手し、やがて黒部川、常願寺川筋でもぞ



明治32年富山県ではじめてできた大久保発電所 大久保用水の水を利用して発電した（今の大沢野町塩）



大久保発電所を視察した金岡又左衛門富山電燈社長（右）と密田孝吉支配人（中央）



明治44年にできた庵谷第一発電所 これから工業用電力を供給できるようになる



大正11年開通した黒部鉄道の宇奈月駅 黒部川の電源開発に大きな役割を果たした



富山県営電気の由来を記した銅板 富山県は長く水害に苦しめられてきた 大正9年水害予防も兼ねて 水力電気を起す計画ができ 常願寺川黒部川に発電所が作られた



大正6年 新湊町にできた電気製鉄（現在の日本鋼管） 富山県における電力消費型の企業のはじめである



明治40年伏木町にできた 北陸人造肥料株式会社



大正2年に開かれた 一府八県連合共進会



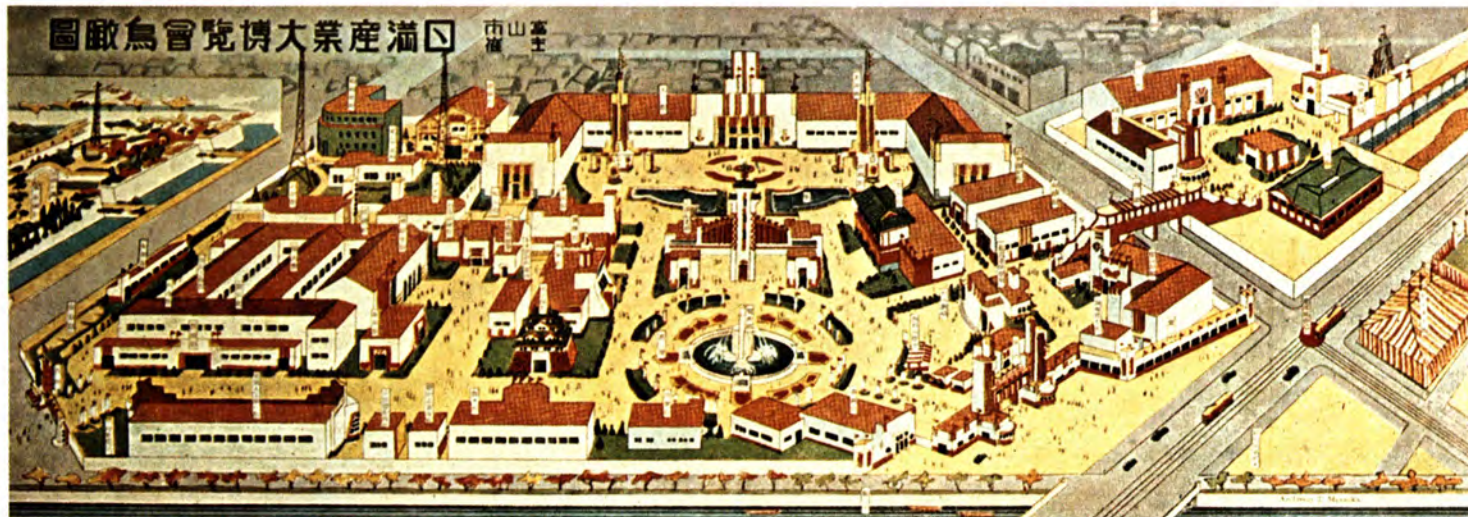
日滿産業大博覧会ポスター



昭和5年庄川水系ではじめてできた小牧ダム

くぞくと電源開発がはじまった。昭和10年ころには「電源王国富山」の名は広く全国に知られるようになり、豊富で安い電力を求めて日産化学・日本カーバイド・日満アルミ(現在の昭和電工)などの工場がつぎつぎと立地し、農業県富山から工業県富山へとその姿を変えていった。

電源地帯が県外資本によって開発されていくのに刺激され、大正9年、東園基光知事ひがしどのもとみちは、治水・財政・産業の三点を同時に強化することを目的として県営電気事業を始めた。はじめに水害に悩まされた常願寺川支流和田川筋で着手されおおいに成果をあげた。しかし、太平洋戦争が始まると電力は国家統制になり、県営電気事業も昭和17年には日本発送電会社に吸収された。



昭和11年神通川廃川地において開かれた 日滿産業大博覧会会場

教育の充実

明治5年、学制が發布されたがそのころの悩みの一つは教員の不足であった。本県では、富山市に「新川県講習所」を開いて教員を養成した。明治8年にはこれが「新川県師範学校」となり、はじめて師範学校の名前が使われた。

中等学校は、富山県尋常中学校（現富山高校）が最初のもので明治18年に開校し、その後、第一中学校、富山中学校と校名を変更した。高岡中学校（現高岡高校）は明治31年に第二中学校として開校した。

女子教育の出発は他県よりおそく、明治34年によやく富山県立高等女学校が誕生した。

明治の中ごろから日本の産業は急速に発達したので、実業教育もそれにつれて盛んになった。福野農学校・富山県工芸学校（現高岡工芸高校）・富山薬業学校・富山商業学校・高岡商業学校も明治26年～33年ころまでに開校された。

中学校・実業学校が充実するとさらに上級の高等教育機関が不足した。そこで、明治43年には全国で初めての単独の県立富山薬学専門学校が生まれ、また馬場はるの寄付金百万円を基金に旧制富山高等学校が大正13年に開校した。高岡市にも、全国第13番目の高岡高等商業学校が大正14年に開校した。



明治8年創設の富山師範学校この建物は富山市西田地方町にあり多くの教員を養成した



明治18年創設された 富山県立富山中学校 今日富山県立富山高校の前身である



明治27年に創設された富山県工芸学校 今日の高岡工芸高校の前身である



富山県立薬学専門学校 富山薬業学校・富山薬業学校を経て明治43年同校となった のち官立となり 今日富山大学薬学部となった



大正13年 東岩瀬町馬場家の寄付をもとにたてられた 旧制富山高校 のち官立となり 今日富山大学となった



大正14年開校の高岡高等商業学校 今日富山大学経済学部の前身である 現在は工学部の建物として使われている

大河川の改修

内務省(現在の建設省 自治省にあたる)の土木技師として招かれたオランダのヨハネス・デレーケは、明治の中ごろ富山を訪れ常願寺川の荒れはてた姿を見て、「これは川ではない。まるで滝だ。」と嘆いたといわれる。明治18年から大正4年までの県の一般会計をみると、半分が土木費で占められ、そのうち77%が治水堤防費にあてられている。明治35年にはじまった新庄川の大開削^{かいさく}工事は、庄川の運び出す土砂で埋まる伏木港を守り、あわせて庄川下流がくびれて狭くなっているためにおこる水害を防ぐために実施された。しかし、この工事のために、新湊市の西岸一帯は市の中心部から、分断されてしまった。

昭和初年、富山市内を流れる旧神通川^{はいせんち}の廃川地を区画整理して新しい町づくりがおこなわれた。たまたま富岩運河^{くつきく}の掘削工事で一致していたため、その土砂が埋立用に活用された。



常願寺川改修工事(明治25年)



徳久知事の庄川改修工事視察(明治26~27年頃)



庄川改修工事竣工平面図 小矢部川と合流していた庄川は 洪水の災害を少なくするため 別に海に注ぐようにつけかえられた



神通川廃川地と富山市街の一部 明治34年神通川の馳越工事がはじまり 曲流していた神通川は まっすぐに流れるようになった 曲流していた部分は 昭和のはじめ頃から埋め立てられ 今日富山県庁 電気ビルがたてられた



昭和10年着工し38年に完成した 常願寺川本宮堰堤 当時わが国でも第一位の貯砂堰堤であった

米騒動と小作爭議

「越中の女一揆」として有名な米騒動は、大正7年の7月から8月にかけて魚津・滑川・水橋の海岸地帯にまず起こった。米を積み出していく蒸気船に対して、漁師町の主婦らは実力でこれをくい止めようとした。主婦たちは米の暴騰を、地主の売りおしみ・商人の買い占め・北海道への移出にあるとして、安売りを要求して浜辺に集まり、米の運搬夫をおそい、米屋を襲撃しそれを制止する警官と衝突した。

これはさらに富山や高岡へとひろがり、新聞に報道されるにつれてさらに東京・大阪など1道3府32県に拡大し、参加者の数も70万人に達し、このために寺内内閣は総辞職した。

小作料の引き下げや耕作権の確保を要求して、しばしば小作爭議が起こった。その中でも鷹栖村(今の砺波市)・立野村(今の高岡市)・大沢野町等の爭議が知られている。さらに大正から昭和にかけて各地に農民組合が組織され、爭議が激化していった。

こうして、米騒動を転機として、しだいに民衆の自覚が高まり、やがて労働運動や農民運動へと展開していった。



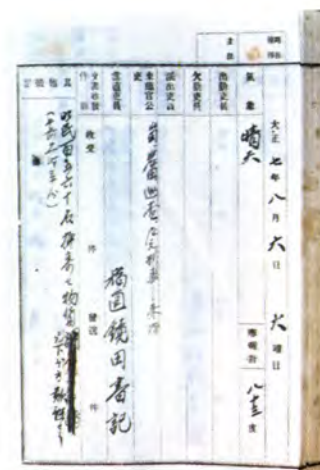
米を船に積みこむ女仲仕（魚津港）



米騒動のぼつ発を報する 富山日報
(大正7年7月25日)



米騒動当時の米蔵（魚津市）



群衆が押し寄せたことを記録した当時の滑川町役場日誌



岡本一平の漫画

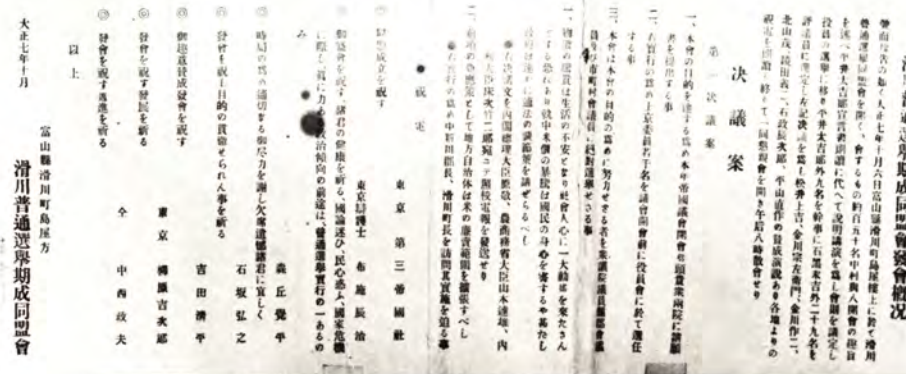


大家庄舟川新(いまの朝日町)の小作人42人が年貢の2割引を要求した記事(大正15年10月1日富山日報)

普選運動の高まりと労働運動

明治23年に第1回の帝国議会在が召集されて議会政治が始まった。しかし国会議員を選ぶ者は、納税金額などによって条件がつけられ制限されていた。そこで、一般国民の間には、ひろく選挙権を与える普通選挙の要望が高まり、同32年にそのための期成同盟会が結成された。大正時代にはいい、デモクラシー運動が起こり民主主義思想が普及するにつれて普選運動が高まり、県下では滑川町に期成同盟会が発足した。その後、大正14年に普通選挙法が制定され、昭和3年に始めて普通選挙が実施された。

また、大正7年に起きた米騒動などの影響により団結の必要を自覚した労働者たちはさらに自分たちの要求を勝ち取ろうとし、各地で労働組合を結成した。大正10年ごろには大久保町の日雇人夫・城端町の道路工事人夫や伏木町の化学工場の労働者などの間に労働組合ができた。ついで富山メリヤス工場女工・中越鉄道従業員・魚津郵便局従業員の労働争議、大正製麻従業員のストライキなどが続発した。なお、昭和6年5月1日には富山・伏木で県下最初のメーデーが行なわれた。



大正7年滑川町で発足した 普通選挙期成同盟会の発会概況と決議案

決議案

一本會の目的を達する爲め本年帝國議會開會勇頭貴衆兩院に請願書を提出する事

二右實行の爲め上京委員若干名を議會開會前に役員會に於て選任する事

三本會員は本會の目的の爲めに努力せざる衆議院議員縣郡會議員及び市町村會議員を絶対に選挙せざる事

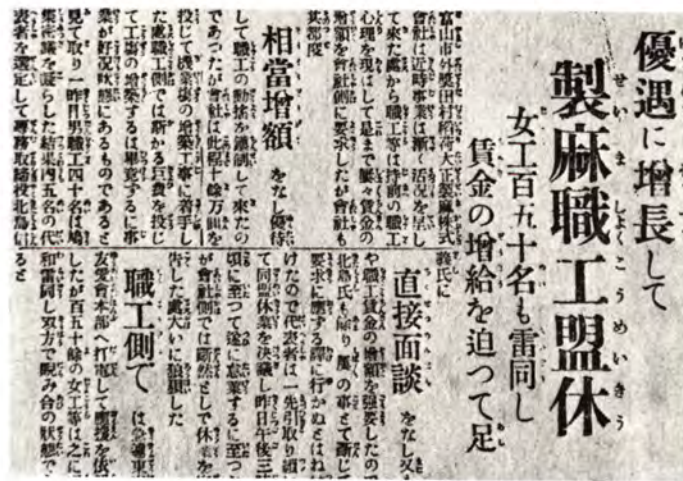
右決議す

大正七年十月

滑川普通選挙期成同盟会



滑川普通選挙同盟会宣言書



大正の中頃からしだいに労働争議も増加してきた

衆議院議員選挙 施行年月日	議 員 定数	選挙有 権者数	投 票 者			棄 権 者 数	投票率
			有 効	無 効	計		
大正 6・5・10	7	24,424	23,013	118	23,131	1,293	%
" 9・5・10	7	45,968	40,821	293	41,114	4,854	...
" 13・5・10	7	47,501	42,395	291	42,788	4,713	...
昭和 3・2・20	6	158,531	139,376	886	140,262	18,269	88.5
" 5・2・20	6	160,829	145,501	788	146,296	14,533	91.9
" 7・2・20	6	163,336	146,565	693	147,260	16,076	90.2
" 11・2・20	6	172,751	146,131	715	146,846	25,928	85.0
" 12・4・30	6	176,373	146,403	954	147,357	29,016	83.6
" 21・4・10	6	515,257	...	3,577	...	106,860	...
" 22・4・25	6	529,431	393,785	3,223	397,008	132,323	75.0

(資料) 富山県統計書、富山県地方課

富山県における選挙権者の増加 昭和3年はじめて普通選挙が行なわれた結果有権者は前回の3倍になった



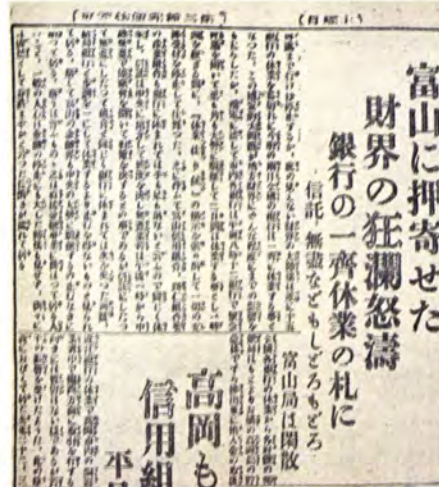
昭和6年5月1日に行なわれた富山県ではじめてのメーデーの写真(5月2日富山日報)

不景気と電気争議

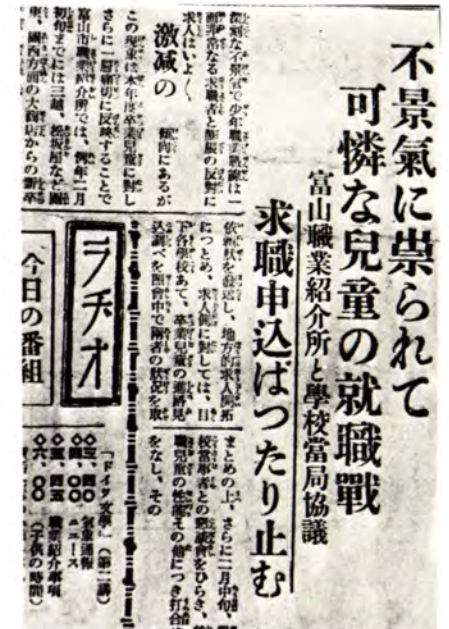
大正9年の第一次大戦後の不景気による経済恐慌、大正12年から昭和2年にかけての関東大震災後の金融恐慌、昭和4年から7年にかけての世界大恐慌は日本経済に大きな影響を与えた。国民生活は物価下落・企業倒産・銀行破産・失業者増大・農村疲弊という深刻な打撃を受けた。富山県では、とくに高岡の銅器業と県下の織物業の被害が大きかった。

さらに昭和2年4月に3週間のモラトリアム（預金の支払猶予令）が政令で施行され県下で37の銀行が休業したがこのとき破産した銀行がいくつかあった。その後も弱小銀行の合併統合がつづいた。また、農村もこれら恐慌のあおりを受けて疲弊した。

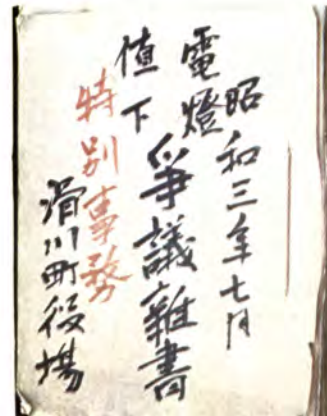
また、この不景気のなかで昭和2年10月に三日市町（今の黒部市）青年団員の「富山電気株式会社」に対する料金値下交渉に端を発した電気争議は、各地へ波紋を投げかけた。この運動は滑川・水橋・東岩瀬の各町に波及して大きな社会問題となったが、翌3年8月富山県知事の調停によってようやく解決をみた。



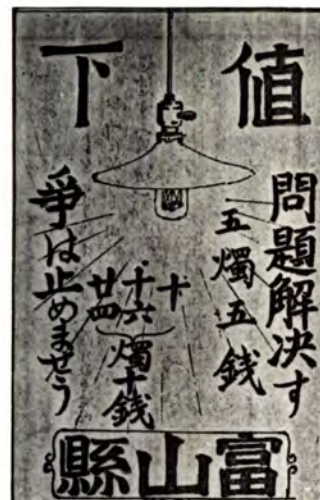
金融モラトリアムによる 銀行休業を報ずる記事（昭和2年4月23日富山日報）



児童の就職戦線の不景気を伝える記事（昭和6年1月30日北陸タイムス）



昭和2年折からの不景気を反映して電気料金値下の運動が起きた その時の滑川町役場の記録



電気争議は白根知事によって 昭和3年に解決した それを知らせるポスター



アセチレン灯をつけて 電気会社の消燈に対抗する滑川町民

大正前後の世相

大正から昭和初期にかけて、西洋風の生活文化が都市を中心として人びとの生活にとり入れられた。

本県でも、民主主義的な考え方は人々の生活にまで深い影響を及ぼした。大正に入り電燈・自転車など実用的なものが普及するとともに、しだいに洋風化していった。とくに服装では中折帽・麦わら帽が流行し洋装の婦人も見られるようになり、官吏はもちろん店員、農民にいたるまで洋服を着、靴をはくようになっていった。

また総曲輪などの繁華街では、商店やカフェー・洋風飲食店・簡易食堂・歌劇女優のプロマイド屋などが、ならぶようになっていった。

野球やテニスなどのスポーツもとり入れられ娯楽も大衆化し、常設の映画館が開設され総曲輪には国技館さえも開設された。

しかし他面に米騒動や小作争議・経済恐慌などの暗い現実があり、県民は庶民感情をよみこんだ“船頭小唄”などの歌謡曲を口ずさんだ。



江戸末期からはじまった 富山の土人形



昭和はじめころの電話

大正末頃から 出廻り出したラッパ型ラジオ



明治の末頃から普及しはじめてきた自転車



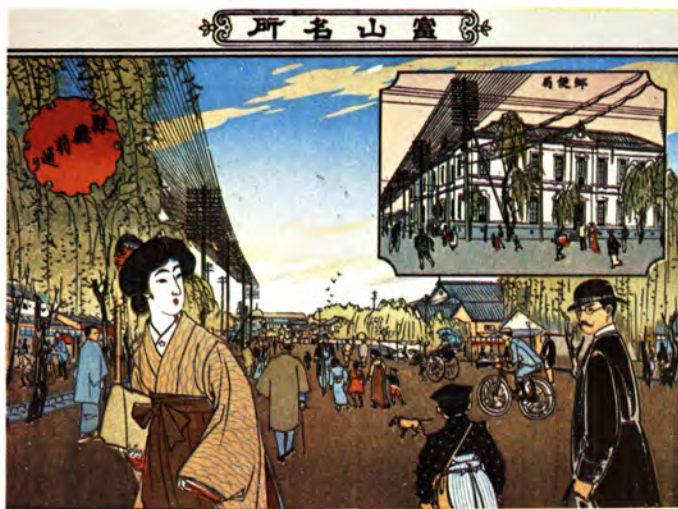
電話線が引かれた頃の福光町（明治末期）



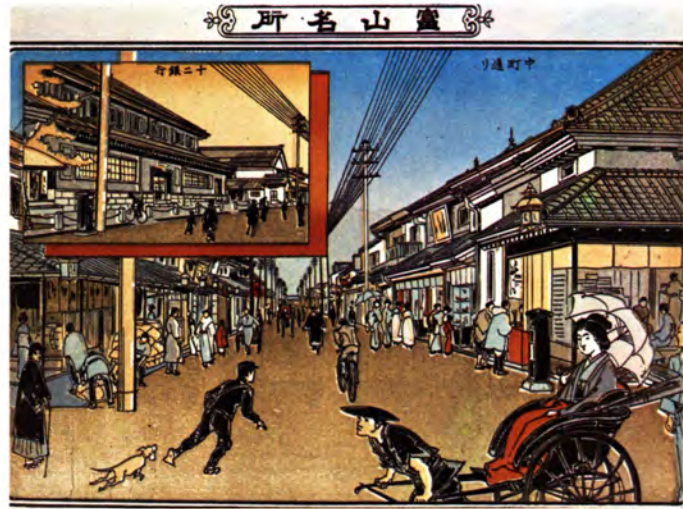
明治36年横綱になった梅ヶ谷



明治44年横綱になった太刀山



県庁前通り（今の富山市大手町）



中町通り（今の富山市中央通り1丁目付近）



呉羽山



日枝神社（富山市山王町）



上海事変に 郷土の35連隊がはじめて出征した その時の見送り風景（昭和7年3月上市町相ノ木小学校児童）



国防婦人会員の 廃品回収作業（新湊町）



空襲に備えての 新湊町での消火訓練（新湊町）



軍事訓練をうける 高岡商業学校生徒（昭和10年代）



勤労働員当時の 高岡高等商業学校の生徒(昭和18年ごろ)



出征軍人に送った 寄せ書(昭和18年)

戦争への傾斜

昭和6年9月の満州事変につづき同12年7月には日華事変がおこり、軍部による全体主義化・軍国主義化が推進され、泥沼的な長期戦になっていった。そして、ついに16年12月8日アメリカ・イギリスと中国における利害の対立から太平洋戦争に突入した。

県民は国家総動員法のもとに、労働・物資・資金・施設・事業・物価・出版などに戦時統制をしいられ、生活はしだいに苦しくなっていった。各地に愛国婦人会・国防婦人会が設立され、銃後の守りに努めた。空襲に備えて、防空演習が続けられ、15年には常会と隣組が設けられた。十二銀行・富山銀行・高岡銀行・中越銀行は一県一行の方針のもとに統合され、私鉄・自動車会社も富山地方鉄道に統合された。さらに学生・生徒は軍需工場に勤労働員され、戦争はますます激しさを加えていった。

戦時下の庶民生活

満州事変・日華事変・太平洋戦争と戦争が激しさを加えるにしたがって、県民は戦時生活の自覚を強くもたなくてはならないようになった。駅頭には出征兵士を送る小学生の旅行列が見られ、町かどには戦地の兵士のために千人針を求める婦人の姿が多く見られた。

こうして、戦争の激化につれて、日常の物資は不足し、人びとは窮乏生活に耐えなくてはならないようになった。「ほしがりません勝つまでは」という戦時標語をひたむきに信じて、人びとは戦争の遂行に全力を尽くした。生活必需品は配給制・切符制となり、物価も公定価格で統制され、食料不足を補うために、学校では校庭の菜園化がすすめられた。昭和18年には、さらに物資の欠乏が深刻になり、習字用の文ちんや学制服のボタンさえも軍需物資として供出が求められた。

東京をはじめ本土各地で、アメリカ軍による空襲が激しくなってくると、疎開が行なわれるようになった。昭和19年には東京の学童約1万が県下の寺院に疎開した。

配給前基準表 (一人一日)	
年令別	1-2才 3-5才 6-10才 11-15才 16-25才 26-60才 61才以上
基準	160g 220g 290g 370g 380g 355g 320g

代替食糧 / 米換算表	
物質名	代換物量
押麥	1.5倍
大豆	1.5倍
小麦粉	1.5倍
乾麺	1.5倍
豆類	1.5倍
食パン	1.5倍

本通帳 / 取扱二紙	
一本通帳	二市町村長印・町内会長印・イモハ無効
二本通帳	二市町村長印・町内会長印・イモハ無効
三本通帳	二市町村長印・町内会長印・イモハ無効
四本通帳	二市町村長印・町内会長印・イモハ無効
五本通帳	二市町村長印・町内会長印・イモハ無効

家庭用飯米購入通帳



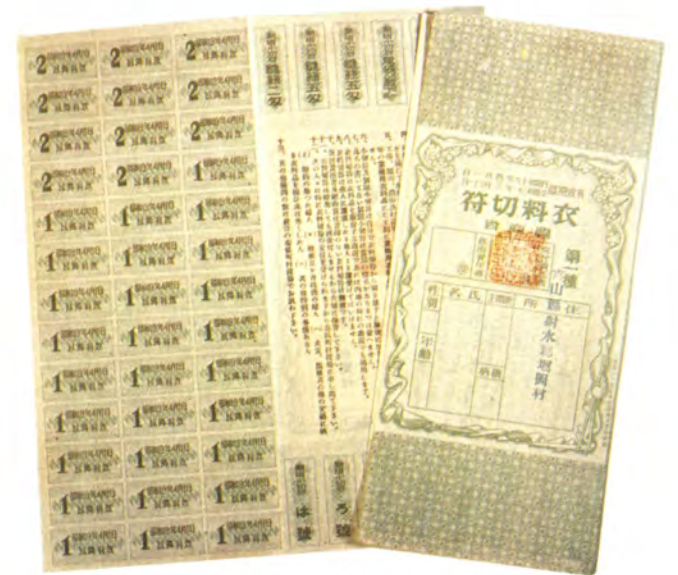
慰問袋の製作 (砺波女学校)



元旦の食膳の祈り 城端町善徳寺へ疎開した東京都常磐松小学校児童



昭和17年頃のポスター



衣料切符 品物によって点数がきまっております。切符がなければ衣料品は買えなかった



無言の凱旋 (高岡市勝興寺)

富山大空襲

昭和20年8月2日午前零時過ぎから未明まで、約70機のB29爆撃機の来襲を受けた富山市は、^{しょう}焼い弾の攻撃で一夜にして焼土となってしまった。

被災世帯は2万5千、死者約2300人、重軽傷者約8000人という大きな被害を受けた。富山市の被害率は、1000人あたりの死者13.5人、負傷者47人で、全国92の戦災都市の平均率(1000人あたり死者8.7人、負傷者13.3人)を大きく上回るものであった。しかも、死者の60%以上が女子であったという。

この空襲の特色は、周辺部から焼い弾を落とし、しだいに中心部を攻撃して袋のねずみにするという戦術であった。空襲の一夜が明けた富山市は瓦礫の山で、富山駅頭から視野にはいるものは当時まだ少なかった鉄筋コンクリートの建物だけであった。

今日の富山市の繁栄から当時の悲惨な姿は想像もできなくなったが、戦禍のなまなましい体験は銘記すべきであろう。



炎上中の富山市



米軍機がまいた伝單(ピラ)



外部だけ残して焼け落ちた大和百貨店



戦災後の富山市 荒町より西町方面を見る



富山空襲を伝える記事(昭和20年8月2日北日本新聞)

近代の美術工芸

近代の富山県の美術工芸は各部門にわたって、おおいに振興した。

画家としては、幕末から明治初期にかけて活躍した木村立嶽・谷口霧山などがいる。また石崎光瑤は竹内栖鳳門下のすぐれた画家で、西欧・インドに遊学し東西の長所を融合して新しい日本画の境地を開いた。

彫刻では、井波がその伝統工芸を生かし、今や彫刻の町として全国的に注目されている。その他能彫の名工畑正吉、大理石彫の横江嘉純、木彫の佐々木大樹・松村秀太郎・西田秀など多くの作家をはい出した。

工芸部門では、360年の伝統を誇る高岡銅器の近代化とともに、彫金鍍金技術では関儀平・内島市平など、漆芸では勇助を受け継ぐ彼谷芳水、錆絵の高瀬直義・横山白汀などの作家がいる。山崎覚太郎は文化功労者・日展理事長として、わが国工芸界最高の指導者である。

陶磁器については越中瀬戸・小杉焼・石戸焼・舟見焼などがあつた。また宋磁の研究をした石黒宗磨は人間国宝に選ばれた。



山崎覚太郎 飛翔



石黒宗磨 黒釉褐斑文壺



佐々木大樹 大地に



荒谷直之介 五ヶ山の女たち



畑正吉 出山釈迦



郷倉千靱 山の秋



石崎光瑤 花鳥の図



中島奎堂 立山雷鳥図



横江嘉純 愛こそ平和の母なれ

郷土に輝く人びと



金沢大学の前身医学館
を設立した 黒川良安



今日の富士銀行の創設
者である 安田善次郎



明治4年シベリアを横
断した 瑛珉寿安



水と戦い今日の佐藤工業の基
礎を作った 初代佐藤助九郎



浅野セメント等種々の事業
を手がけた 浅野総一郎



富山県電力事業の創
始者 金岡又左衛門



富山県ではじめて大
臣となった 南 弘



社会研究家であり「日本の下層
社会」を著した 横山源之助



日本国語学の大成者であり県下ただ一人の文化勲章受賞者の 山田孝雄



コクヨ株式会社の創設者の 黒田善太郎



大谷重工・ホテルオータニ等種々の事業を手がけた 大谷米太郎



農林・文部大臣となり日中友好にも尽くした 松村謙三



国務大臣・読売新聞社主であった 正力松太郎



厚生大臣・小松製作所会長であった 河合良成



今日の北陸電力業界の基礎を作った 山田昌作

現代

激動する世相

昭和20年8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れ、終戦となった。10月には、アメリカ軍が富山市に進駐した。昭和20年から21年にかけては、すべての生活や生産のための物資が不足した。とくに食糧が欠乏し、主食の配給も遅れがちで、高岡駅前など各地で「米よこせ大会」が行なわれた。主婦は満員列車にしがみつきながら、いもやかぼちゃを求めて買い出しに出かけた。昭和21年には、インフレをおさえるため預金が自由に引き出せなくなり、新円が登場した。また、コレラが発生し、富山湾の漁業は一時停止させられた。農地改革が実施され、地主が没落した。昭和22年には、新学期から6・3・3制教育がはじまった。また、15人の婦人警官が誕生した。労働基準法が施行されたのもこの年である。新戸籍法が23年に施行され、この年サマータイムが実施された。また第1回県民体育大会が開催されている。24年には、工場閉鎖があいついだ。対面交通が実施されたのもこの年である。25年に朝鮮動乱がおこり、26年にはサンフランシスコ講和条約に調印、27年にはアメリカ駐留軍が離県し、評判の悪かったサマータイムも廃止された。そして民間放送が始まり、富山県総合計画も定められ、ようやく戦後は復興へのきざしをみせはじめた。



復興事業前の富山市街地 上端には国鉄富山駅
下端には田制富山中学（現富山高校）がみえる



人々は乏しい品物を得るために
幾度も足を自由市場に運んだ



食料を求める人で どの列車も満員
であった 列車を待つ長い列が続く



上 農地改革の際 農地を買収された
地主には国庫債券が渡された

下 新円切換えて 証紙を貼
った 紙幣が使われた



市民を激励なさる天皇陛下（昭22年10月）



新しい教科書が間に合わず スミで
ところどころを塗りつぶして使用した



新聞用紙に印刷した教科書を
自分で とじ合せて勉強した

らくでした
永らく
様御苦勞
皆様の御苦勞
引揚げの御苦勞

異國の丘へ
いよ 第二次配船

第一次配船高砂丸以下四隻は豫定通り八名の引揚げを完了したが、續いて第二次船九隻が決定され、第一船は七月十二日鶴港を出港し二日おきに逐次出帆しナホカに向い舞鶴入港は次の通りである。

第一船大郁丸十八日、第二船英彦丸二十三日、第三船遠州丸二十二日、第四船恵山丸二十四日、第五船信洋丸二十六日、第六船山丸二十八日、第七船明優丸三十日、第八船榮豊丸一日、第九船高砂丸八月二日なお各船とも二千収容で計一万八千名で、上陸後検疫、入浴、着替調査事務などをおえ、それぞれ引揚寮に疲れを休憩土に向うが列車は次の通りである。

◇東舞鶴驛發 六時四十分 ◇函館發 七時
石動驛着 一八時三分 ◇泊驛着(翌日)五時
高岡驛着 一八時五分 富山驛着 五時五分
富山驛着 一九時三分 高岡驛着 六時三十分
縣民はこれら同胞を温い愛の手で迎えましよう。
//愛の手を歸つた人に、待つ家に//

引揚者が続々と帰ってきた



婦人警官が誕生した

近代化進む農林漁業

昭和22年に行なわれた農地改革によって、小作農から自作農になった農家は、米の増産に意欲を燃やし、土地改良と技術の向上に努力し、生産量は年ごとに多くなっていった。

経済が立ち直りはじめた昭和30年ごろには、兼業をする農家がふえ、動力耕うん機が普及した。2割増産5割省力を目標に近代化が進む一方、野菜・花・畜産が盛んになった。

昭和40年代になると、コンバインやもみ乾燥施設が利用され農地は、30アール区画に整理が進んだ。国全体として米が余るようになり、昭和45年度から米の生産調整が行なわれた。

山林は、戦後も復興資材としてむやみに伐られ、荒れた山を緑で包むため植林が進められた昭和44年に、全国植樹祭が砺波市頼成山らんじょうで天皇・皇后両陛下をお招きして行なわれた。

林道の整備、しいたけなど特殊林産物の生産、木材の利用など、林業にも新しい波が押し寄せてきている。

漁業は、漁港がしだいに整備され、近代装備をした船団が北洋で活躍するようになった。

昭和40年代にはいって、獲る漁業から育てる漁業へと大きく方向を変えようとしている。



機械化進む農業・大型コンバインによる収穫作業



全国植樹祭が砺波市頼成を中心にして開かれた（写真は林業試験場でお手播される両陛下）



水郷射水平野では刈り取った稲を船で運んでいた（昭和25年頃）



大漁旗をかけた北洋へ（魚津港）



経済発展の中心である富山市街（昭和46年）



臨海工業地帯の造成が進み 新しい工業が立地してゆく



とだえていた中国との貿易が再開された（昭和47年）

躍進つづける商工業

食べる物も着る物も乏しかった昭和20年代のはじめのころ、駅の付近などには自由市が立ち人が集まった。昭和29年には富山産業博覧会が富山市で開催されるなど、品物は豊かになり商店街にはにぎわいを見せ始めた。昭和30年代の後期には、販売競争が激化し、高層ビルが林立するようになった。またスーパーマーケットやチェーン店形式のものが増加していき、40年代にはいと、消費者運動が活発となり、商業の体質改善を迫られるようになってきた。

工業は、兵器などの軍需工業から民需工業へと変わり、繊維・化学肥料工場がまず復興し、昭和25年の朝鮮動乱のころを境にして急速に発展した。高岡市では、アルミ鍋景気がおこり、また機械・鉄鋼などの重化学工業が発展した。一時的な不況にも見舞われたが、昭和30年代には金属製品・紙パルプ・プラスチックなどの新しい工業が伸びた。昭和39年に富山・高岡地区が新産業都市に指定され、富山新港の後背地に巨大な臨海工業地帯が生まれた。内陸部でもファスナー・自動車・電気などの工場が誘致された。しかし公害が各地に発生するようになり地域を育て愛する工業への転換が真剣に望まれている。

公害との戦い

本県の工業は、安い電力と豊富な水を利用する電解電炉や紙パルプ工業が盛んであったため、煤煙や排水による公害がひどくなった。

また、自動車が急激に増加し、排気ガスによる公害、工場などの騒音も増し、生活環境がどんどん悪くなった。神通川流域におこったイタイイタイ病は、鉱毒によるとされイタイイタイ病裁判は、昭和47年に結審となり、患者側が勝訴した。

農業では、畜産経営の規模が大きくなるにつれ、その排泄物の処理がむずかしくなり、悪臭と川水の汚染が問題となってきた。さらに生活排水の増加や使い捨て時代によるゴミ戦争が起こってきた。また交通事故が多発するなど、人間の生存をおびやかすまでになってきた。

昭和40年代にはいると、公害を防ごうという強い住民運動がおこってきたため、国や地方公共団体も美しい郷土をよみがえらせるために、監視の目を光らせ規制を強めた。企業は、防止対策をとらなければ成り立たないようになり対策に努力するようになってきた。



経済開発の煙は県土をおおう（昭和40年）高岡市



立山の美しいたずまいを いつまでも大切にしたい



公害をなくするため 活躍する新装なった県公害センター（昭和47年）小杉町

自然と文化財を守る

本県は、三方を立山を主峰とするけわしい中部山岳と丘陵に囲まれ、数多くの急流が富山平野をうるおして富山湾に注ぐ美しい自然に恵まれている。

戦後数年間、山林の乱伐により山野は荒廃したが、県民の緑を愛する気持ちは変わることなく、昭和25年から毎年植樹祭が県下各地で開催されている。また、青年団が中心となって立山美化の奉仕作業が毎年続けられている。また、花いっぱい運動が、昭和32年頃から行なわれてきている。しかし、産業開発が活発になるにつれて、自然破壊がおこってきたため、自然保護の気運が昭和45年ごろからにわかに高くなり、市民運動のかたちで盛りあがってきた。

祖先の残した文化財は、世相の混乱した20年代に四散し、そこなわれたものがかなりあった。また急激な都市化によって、文化財をとりまく環境条件が悪化してきたこうした状況から文化財を守るため、戦後間もなく、その修理と防災施設の整備が続けられている。昭和38年には、県文化財保護条例が制定され、以前に指定したものを再審査して、改めて指定し、その保存に力を入れている。昭和48年2月末で、国指定文化財63件、県指定文化財168件のほか、市町村指定のものが多数ある。



風土記の丘には 立山信仰の遺跡が守られている



埋蔵文化財の発掘さかん



日本三大民謡のひとつ 越中おわらの街流し



開発の進む秘境五箇山は 史跡の豊庫でもある

整備進む生活産業基盤

敗戦後、残されたのは、荒れ果てた郷土であった。道路・橋・鉄道などの交通施設の復興は、近代的技術の導入によって進められた。しかし、経済の発展は予想をこえ、生活産業の基盤ともいえる交通と都市環境の整備との間の調和がくずれてきた。とくに、市街地の農村部への無秩序な進出が続き、都市の生活機能も農村の環境も整備が追いつかず、45年には土地の利用区分を定め、重点的に整備することになった。しかし、古い道路・橋・鉄道や港の改良には限界があり、新たに高速大量交通体系の整備が進められることになった。新国道8号線は昭和40年に一応完成し、昭和38年には富山空港が開設、41年には国鉄神岡線が開通、43年には富山新港が開港した。

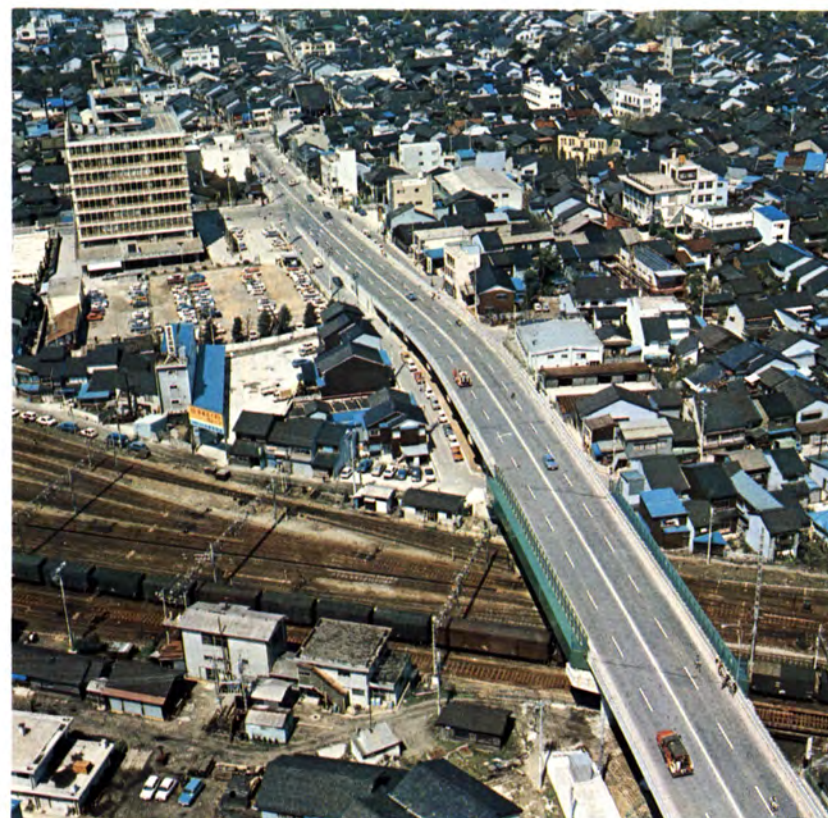
一方都市計画は各地で進められ、耐火構造の街造りが各地で実施され、上下水道・通信網も急速な整備が行なわれている。北陸自動車道の建設が昭和44年から始まり、北陸新幹線の建設が昭和47年に本決まりとなった。また、小矢部川流域下水道の建設が48年度から着工される計画となっている。



砺波散居村を走る北陸自動車道



快速列車開通



都市交通は立体化が進められていく（昭和47年）



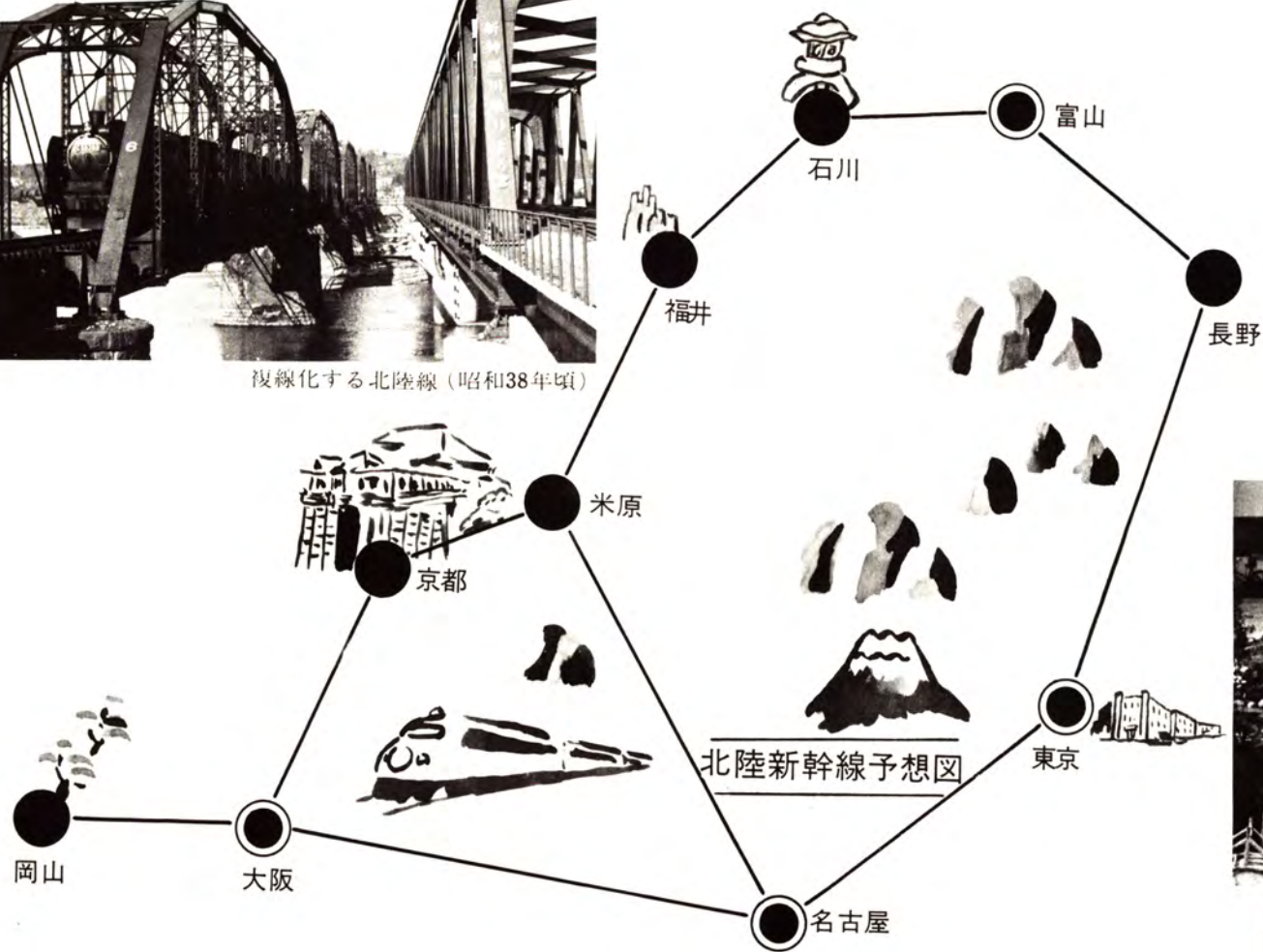
北陸の一体化を促進する
(昭和44年)



緑と太陽の町 太閤山団地の建設は続く



複線化する北陸線(昭和38年頃)



都市づくりとして 下水道工事が
盛んに進められるようになった
(昭和30年頃)

充実する教育

敗戦を境として、教育の内容も、しくみもがらりと変わった。児童は、使っている教科書を墨で塗りつぶして間に合わせた。印刷能力もなく用紙事情が悪いため、新聞社の輪転機で印刷した数ページの教科書をばつばつ配給する状態が続いた。

昭和22年に教育基本法が公布され、翌23年には、教育委員会が設置され、6・3・3制が実施された。戦後の新しい学校教育は、軍国主義や国家主義を排除して、児童・生徒の生活経験を生かして個性を伸ばすことに主力がおかれた。昭和22年には新制中学が、23年には新制高校が県下各地に開校した。昭和24年には富山大学の初の入学式が挙行された。昭和37年には県立大谷技術短期大学が創設され、翌38年には富山女子短期大学が誕生した。

食糧難のため発足した学校給食は、児童・生徒の体位向上に大きな影響を与えた。また、教育機器を取り入れた能力開発も日々進歩している。一方では進学熱が高まり、上級校へ進学する者が増加し、全国屈指の教育水準を誇っている。社会教育面での充実も著しく、生涯教育が実を結びつつある。



有峰と高岡二上に青少年の家を建て 青少年の健全育成が図られた
(二上山青少年の家)



第13回国民体育大会は かずかずの思い出を残した



商業教育センターでの授業



緑の環境に包まれる県立図書館

伸びゆく地方自治

戦前の地方自治は、中央集権の色彩の強いものであったが、戦後のそれは日本国憲法に規定され、大きく拡充強化された。とくに住民が地方行政に参与する権利は、多面にわたって拡充した。婦人に対して選挙権と被選挙権が解放され、選挙権が与えられる年齢が25才から20才に引き下げられた。また、住民が知事を直接選挙することになった。

昭和22年に第1回知事選挙と県議会議員の選挙が実施され、初の婦人県議が生まれている。昭和23年から29年まで自治体警察がおかれた。昭和25年頃から町村合併が促進され、昭和26年に新湊市が、昭和27年に魚津市と氷見市が、昭和29年には滑川、黒部、砺波の3市がつぎつぎと発足した。また、町の規模も大きくなり、行政内容も多様化し複雑化してきた。この結果、昭和20年に2市29町183村あったものが、昭和48年のはじめには、9市18町8村となっている。一方、広域市町村圏が昭和44年からちくじ誕生し、住民の生活圏に根ざす能率の高い行政が進められている。



県民が直接知事と語る会が各地で開かれる



県の行政をじかにみる県政バス教室（呉羽ハイツで）



富山県青年の船の成果は 次第に県内に満ちていく

高度の福祉社会へ

戦後、急激な社会の変化についていけない人や、さまざまな理由で自立できない人が多数でてきた。この人たちを助けるため、昭和21年に生活保護法が施行された。また、疾病を予防し、社会全体の健康を増進するため、公衆衛生に力が入れた。昭和30年ごろになると、国民皆保険が推進され、昭和34年には国民年金が実施されるなど、公的な社会福祉制度がしだいに整備された。昭和40年ごろからは、社会保険や公的扶助の内容を高めるため、その充実がはかれるようになり、福祉国家への歩みが続けられている。

社会福祉事業の向上に、民間の善意も大きな力となっている。昭和20年には、高岡済生会病院が、21年には養護老人ホーム長生寮が、22年には宿所提供施設として誠心寮が設けられた。また、22年には第1回の共同募金を実施された。その後、心身の不自由な人や老人や子どものための福祉施設がつぎつぎと建設され、昭和48年の2月末には、17種33施設になった。さらに高度の福祉社会の実現をめざして、老人や幼い子どもたちの医療費の無料化をはじめ、県民のすべてが同じように幸せであるようにと、愛と繁栄の県政が進められている。



社会全体で 乳幼児の健康を守ろうという気運が次第に強くなった



県民の熱意と援助で建設された民間福祉施設セーナー苑誕生の頃（昭和41年頃）



恵まれた環境の中で 自活するための技術を身につけるセーナー苑(心身障害者コロニー)の充実が進められている



老人の憩いの場 舟戸荘（昭46年頃）



県消費生活センター設置 移動センターも開設 消費者保護が強化される（昭46年）



体の不自由な児童が 治療を受けながら勉強する（高志学園）



健康を守るため食品監視の目が光る

置県100年を めざして

富山県は、明治16年5月9日に石川県から分離独立した郷土富山県の限りない繁栄と、明かるいイメージを育てるために、置県100年をめざして、次の事業が、多彩で息の長い運動として展開されている。

- ◇花と緑の県づくり事業
- ◇芸術文化の輪を広げる事業
- ◇憩^{いこい}の場を広げ、スポーツを楽しむ事業
- ◇若い力を発揮させる事業
- ◇谷間に光と生きがいをもたらす事業
- ◇郷土を見なおす事業

これらの記念事業は県民があらためて郷土を見なおし、その発展の歴史と先達の気概や努力を思いおこすことによって、県民の新たな活力を育てていくことを願いとしている。

住みよい富山県を築くために、県民の積極的な支持と参加が期待されている。



花と緑の県づくり運動に 街頭に出る中田知事（昭47年）



楽しい一家の語らい





スポーツを盛んにする（県立武道館）



ふるさとをみなおそう
常願寺川から立山連峰を
のぞむ



県民公園の構想

富山県のあゆみ

先土器時代	眼目新丸山遺跡、人母シモヤマ遺跡など	1581	天正 9	織田信長の武将佐々成政が越中に入る。
縄文時代	桜峠遺跡、朝日貝塚など	1583	11	佐々成政が上杉方の魚津城を攻めおとし、越中の統一を完成する。
弥生時代	石塚遺跡、囲山遺跡など	1583	13	秀吉、富山城を攻めて佐々成政をくだし、前田利長に婦負・射水・砺波三郡を与える。
古墳時代	中山南遺跡、稚児塚など	1597	慶長 2	前田利長、守山城より富山城に移る。従臣・寺院・商家も多く富山に移る。
658 齊明 4	越の国守阿倍比羅夫が肅慎を討つ。	1604	9	加賀藩、十村制をしく。
690頃	このころ越の国が越前、越中、越後に分かれる。	1606	11	前田利長、砺波八講田村の貢布を受ける。
702 大宝 2	越中の4郡を越後に分ける。	1609	14	富山町中野より出火。市街の大部分および富山城を焼く。利長一時魚津城に移る。
732 天平 4	田口年足が越中守になる。	1619	元和 5	前田利常、新川郡松倉・下田などの鉾山の納税貸米の令を定める。
741	能登を越中にあわせる。(～757)	1624	寛永 元	牛ヶ首用水工事始まる。
746	大伴家持が越中守になる。(～751)	1639	16	前田利次、富山10万石に分封され、富山藩成立。
759 天平宝守 3	東大寺の越中墾田図ができる。	1651	慶安 4	加賀藩改作法に着手し、改作奉行をおく。
767 神護景雲元	砺波臣志留志が東大寺へ墾田百町を寄進する。	1670	寛文 10	加賀藩領の村御印が改められる。
801 弘仁 元	越中の役人に渤海語を学ばせる。	1672	12	富山藩がはじめて西廻り航路で米1万2000石大阪へ送る。
905 延喜 5	立山を開山したといわれる佐伯有若が越中守になっている。	1690	元禄 3	反魂丹を富山商人松井屋源右衛門に販売させる。 (富山売薬のはじめといわれる)
1065 治暦 元	越中国司が荘園の停止を願いでる。	1773	安永 2	富山藩校広徳館創設される。
1116 永久 4	三善為康が朝野群載を著わす。	1789	寛政 元	神通・常願寺川洪水、富山町1900軒、郡方260軒、1万3000石の被害をうける。
1142 康治 元	宮道季式が堀江庄を京都祇園社に寄付する。	1837	天保 8	加賀藩が窮民救済のため、徳政令を出す。
1167 仁安 2	僧相存が大岩経が峰に経塚をつくる。	1851	嘉永 4	加賀藩は海防に着手、伏木・放生津・生地に台場をつくる。
1183 寿永 2	源義仲が倶利伽羅合戦で平氏をやぶる。	1859	安政 6	ロシアの軍艦、四方沖から伏木にあらわれる。
1185 文治 元	源頼朝は義経を追討し、守護地頭をおく。	1868	明治 元	富山藩・加賀藩が越後で反政府方の軍と戦う。
1221 承久 3	承久の変がおこり、越中の武士団は京都方について関東の軍勢と戦う。	1869	2	加賀藩主前田慶寧・富山藩主前田利同版籍を奉還する。
1274 文永 11	文永の役に際して越中の武士団が越前国の敦賀の港を守る。	1869	2	新川地方にばんどり騒動がおこる。
1333 元弘 3	越中守護名越氏が滅亡する。	1870	3	富山藩が合寺令を出し、一宗一か寺に定めたため騒ぎがおこる。
1335 正平10文和 4	守護桃井直常が京都を攻めて足利尊氏と戦う。	1871	4	藩を廃し県を置く。新川県が誕生する。
1380 康暦2天授 6	畠山基国が越中守護になる。	1873	6	小学校が各地で創立される。
1460 寛正 6	高瀬庄に土一揆がおこる。このころから応仁の乱前後にかけて越中の神保長誠らは畠山氏に従ってたびたび畿内で戦う。	1875	8	地租改正が行われはじめる。この頃から伏木港に汽船が入る。
1493 明応 2	足利義材(前將軍)が京都から越中の神保氏をたよって逃げ下る。			
1506 永正 3	一向一揆がおこり越中を支配する。一向一揆と戦った越後守護代長尾能景が般若野で討死する。			
1572 元龜 3	上杉謙信越中に入り、一向一揆を討つ。			

1876	明 治	9	新川県が廃止され、石川県と合併する。				
1877		10	海内果等が相益社談(文明開化の啓蒙雑誌)を発行する。				
1878		11	明治天皇が本県を巡幸される。第百二十三国立銀行(今の北陸銀行)の設立が免許される(12年1月開店)				
1882		15	本県に北立自由党・越中改進黨ができる。				
1883		16	石川県から分かれて、富山県ができる。				
1884		17	中越新聞(後の富山日報)が発行される。				
1885		18	富山大火(焼失約6000戸)				
1886		19	この頃から各地に機業場(絹糸の製糸場)や会社ができる。この年、コレラ大流行(死亡者1万1764人)。				
1888		21	この頃庄川・神通川・常願寺川・黒部川等にしだいに橋がかけられる。				
1889		22	市制・町村制が実施される(本県2市・31町・238村)。伏木港が特別輸出港に指定される。				
1893		26	高岡紡績株式会社(今日の日清紡)が創立される。				
1897		30	中越線(今の城端線)が開通する。この年飢饉で減収50万石。北海道へ多くの人に移住する。				
1899		32	北陸鉄道富山まで開通。大久保発電所(大沢野町)発電開始。				
1900		33	富山市で、関西2府15県の連合共進会をひらく。				
1902		35	この頃、庄川分流工事や神通川 ^{はせこえ} 馳越工事がはじまる。				
1907		40	稲の新品種「銀坊主」が発見される。この頃、土地改良や合口用水事業が多くなる。				
1907		40	この頃、氷見で上野式ぶり大敷網が考案される。				
1910		43	県立薬学専門学校が設立される。				
1913	大 正	2	北陸本線が全線開通する。				
1914		3	富山市中心に県下大水害(死傷者2百余人、家屋の流失300戸浸水1万3000戸)。				
1917		6	この頃から県内に工場(化学・金属・繊維等)がさかんに設立される。				
1918		7	新川地方の海岸地帯を中心に米騒動がおこる。				
1921		10	この頃から不況がはげしくなり、各地に小作争議が多くなる。				
1924		13	旧制富山高等学校が開校する。				
1926		15	富山市営乗合自動車運転開始。この頃からラジオや蓄音機が普及する。				
1928	昭 和	3	富岩運河の開きとともに、神通川廃川地の埋立てがは				
			じまる。				
1931	昭 和	6	不景気がはげしくなり、銀行の破産や労働争議が多くなる。				
1933		8	この頃から大規模工場(繊維・重化学・金属等)が急増し、工業がさかんになる。				
1940		15	県下の新聞を統合して、北日本新聞社ができる。				
1941		16	米穀配給通帳制等が実施され、戦時統制が強まる。				
1943		18	全県の銀行を統合して、北陸銀行が創立される。また私鉄を富山地方鉄道会社に統合する。				
1945		20	空襲により富山市街の大半が焦土となる。ポツダム宣言受諾、終戦。				
1946		21	日本国憲法公布。富山県食糧人民大会が開催される。農地改革がはじまる。				
1947		22	知事公選制となる。天皇北陸巡幸。新制中学が創設される。				
1948		23	新制高校が発足する。第1回県民体育大会が開催される。				
1949		24	富山大学が開校される。				
1950		25	県営球場が完工する。				
1952		27	第一次富山県総合計画が発表される。				
1953		28	町村合併が進む。				
1954		29	立山ケーブルカー開通。富山産業大博覧会が開催される。				
1956		31	魚津市大火。				
1958		33	第13回国民体育大会が富山県で開催される。天皇・皇后両陛下御来県。				
1960		35	有峰ダムが完成する。				
1960		35	立山・黒部・有峰(T・K・A)開発会社が設立される。				
1961		36	イタイイタイ病が問題となる。				
1962		37	県立大谷技術短期大学が開校される。				
1963		38	富山女子短期大学が開校される。黒四ダムが完成する。				
1964		39	富山・高岡地区が新産業都市に指定される。				
1967		42	富山市・高岡市がばい煙規制地区に指定される。				
1968		43	富山新港開港。イタイイタイ病が公害病に認定される。				
1969		44	全国植樹祭、頼成山で開催される。				
1970		45	米の生産調整はじまる。				
1971		46	第1回富山県青年の船が出航する。立山トンネル全線開通。				
1972		47	県民公園の工事はじまる。北陸新幹線が本決りとなる。				
1973		48	置県90年記念事業はじまる。				

富山県歴代知事名			富山県歴代議長名					
氏名	就任年月日	氏名	就任年月日	氏名	就任年月日	氏名	就任年月日	
国重正文	明治16. 5. 9	武部尚志	明治16. 8. 20	吉田清平	昭和6. 12. 1			
藤島正健	21. 10. 29	南兵吉	17. 6. 9	鹿熊久安	7. 12. 1			
森山茂	23. 7. 25	米沢紋三郎	18. 3. 10	砂土居次郎	8. 12. 5			
徳久恒範	25. 8. 20	島田孝之介	19. 10. 11	高広政之助	9. 12. 7			
安藤謙介	29. 4. 11	石坂専之介	23. 3. 22	片口安太郎	10. 10. 16			
石田貫之助	30. 4. 7	谷順平	23. 11. 26	森丘正唯	11. 11. 28			
阿部浩	31. 2. 5	堀二作	25. 7. 25	飛見丈繁	12. 11. 30			
金尾稜巖	31. 8. 3	金岡又左衛門	27. 7. 25	吉田清平	13. 11. 26			
桧垣直右	33. 1. 19	竹脇茂三郎	27. 9. 28	五十嵐為太郎	14. 10. 14			
小倉久介	35. 2. 8	大矢四郎兵衛	28. 2. 12	堀田勝文	15. 12. 26			
小李実隆	35. 12. 30	堀二作	29. 9. 17	野上資良	17. 11. 24			
川上親晴	38. 12. 14	上埜安太郎	31. 9. 21	武部毅吉	19. 11. 29			
宇佐美勝夫	41. 3. 28	関野善次郎	32. 10. 12	前田治吉	22. 5. 31			
浜田恒之助	43. 6. 14	菅野新作	33. 12. 6	高原耕造	24. 7. 2			
木間瀬策三	大正4. 8. 12	岡本八平	34. 12. 16	須河信一	26. 5. 12			
井上孝哉	6. 1. 29	大橋十右衛門	36. 10. 14	湊栄憲吉	27. 11. 30			
東園基光	8. 4. 18	森丘覚平	41. 12. 15	岩川毅	29. 12. 22			
信太時尚	10. 12. 24	根尾宗四郎	42. 12. 21	岩川順治	30. 5. 14			
伊藤喜八郎	11. 9. 26	吉田久兵衛	44. 10. 13	舟橋順八郎	31. 10. 28			
岡正雄	13. 7. 23	浅野長三郎	大正2. 11. 22	分家義八郎	32. 3. 26			
白上佑吉	15. 9. 28	野島茄三郎	4. 7. 1	粟田吉郎	33. 3. 25			
白山竹介	昭和2. 5. 17	荒井健三	4. 10. 9	古市繁太郎	33. 11. 8			
山根恒三	4. 2. 6	藤田久信	5. 11. 14	中嶋兼次	34. 5. 11			
鈴木敬一	6. 4. 15	高桑直助	6. 11. 10	金厚伴二	36. 12. 21			
斉藤樹郎	7. 6. 28	野松以寛	7. 11. 15	桜井与三	37. 12. 15			
土岐銀次郎	10. 5. 25	佐々木平兵衛	8. 11. 15	宇於崎章吉	38. 5. 8			
矢野兼三	13. 4. 18	橘林太郎	9. 11. 19	柚木兼久	39. 6. 26			
町村信五	16. 1. 7	角島吉明	10. 11. 17	藤井泰三	40. 12. 20			
坂信弥	18. 4. 23	谷竜藏	11. 11. 25	和田泰三	41. 7. 14			
西村彰一	19. 2. 25	佐々木平兵衛	12. 10. 15	中嶋兼次	42. 5. 18			
岡本茂	19. 7. 25	長谷川庄藏	13. 11. 4	高野由郎	42. 12. 16			
吉武惠市	20. 10. 27	米沢元健	15. 6. 22	玉生孝久	43. 12. 18			
田中啓一	21. 1. 25	大西篤示	15. 11. 25	広谷文作	44. 12. 1			
石丸敬次	21. 7. 9	根尾長次郎	15. 12. 23	山田伊作	45. 9. 28			
羽根盛哲	22. 2. 28	金山米次郎	昭和2. 10. 15	山田伊六	46. 5. 10			
館哲二	22. 4. 19	飯倉平兵衛	2. 12. 23	松沢平公	47. 3. 22			
高武邦	23. 11. 23	大西篤示	3. 11. 23		48. 3. 23			
吉実吉	31. 10. 1	藤田義太郎	5. 11. 18					
中幸吉	44. 12. 30	片口安太郎	6. 10. 18					

資料提供者 (アイウエオ順 敬称略)

愛 場 尚 三	北 日 本 新 聞 社	常 楽 寺	富 山 市 立 郷 土 博 物 館
朝 日 町 役 場 境 支 所	経 王 寺	浄 蓮 寺	滑 川 市 立 図 書 館
朝 日 町 立 宮 崎 小 学 校	県 立 小 杉 高 等 学 校	瑞 泉 寺	奈 良 国 立 文 化 財 研 究 所
芦 峠 寺 一 山 会	県 立 高 岡 工 芸 高 校	専 立 寺	入 善 町 教 育 委 員 会
安 居 寺	県 立 永 見 高 等 学 校	総 持 寺	西 井 龍 儀
石 川 県 立 郷 土 資 料 館	久 保 健 一	大 門 文 化 会	西 田 仙 作
石 崎 文 平	俱 利 伽 羅 神 社	高 岡 市 立 図 書 館	日 石 寺
石 原 与 作	黒 部 市 立 石 田 小 学 校	高 岡 市 立 博 物 館	日 本 鋼 管 富 山 電 気 製 鉄 所
稲 垣 貞 雄	慶 応 大 学 考 古 学 研 究 室	高 岡 市 立 博 労 小 学 校	根 塚 伊 三 松
井 波 町 立 図 書 館	広 貫 堂 広 報 課	高 岡 市 立 伏 木 小 学 校	福 光 町 立 図 書 館
射 水 神 社	光 禅 寺	高 瀬 神 社	堀 岡 神 明 社
魚 津 市 立 松 倉 小 学 校	国 立 公 文 書 館	竹 内 龍 二	本 覚 寺
浮 田 家 (黒 沢 慎 子)	国 文 学 研 究 資 料 館	谷 口 民 之	本 法 寺
鶴 坂 神 社	国 立 史 料 館	谷 崎 範 一	前 田 育 徳 会
牛 々 首 用 水 土 地 改 良 区	護 国 八 幡 宮	多 田 秀 雅	湊 湊 湊
内 山 治 八 郎	佐 伯 豊 邦	誕 生 寺	深 山 了 芳
宇 奈 月 町 教 育 委 員 会	佐 伯 幸 長	長 慶 寺	八 坂 神 社
永 安 寺	斉 藤 三 郎	長 養 寺	山 崎 源 治
江 尻 セ ツ 子	桜 井 健 太 郎	東 京 国 立 博 物 館	山 本 源 太 郎
小 川 寺 光 学 坊	篠 井 忠 一	東 京 大 学 人 類 学 研 究 室	結 城 嘉 信
小 沢 栄 造	十 三 寺	東 大 寺 正 倉 院	吉 田 実 松
小 矢 部 市 教 育 委 員 会	瑞 竜 寺	砺 波 市 総 務 課	米 原 米 松
雄 山 神 社	勝 興 寺	富 山 県 教 育 委 員 会 文 化 課	来 迎 寺
海 内 士 郎	清 淨 光 寺	富 山 県 教 育 研 究 所	立 山 寺
金 山 方 象	定 田 実 寺	富 山 県 立 図 書 館	蓮 王 寺
観 世 家	常 福 寺		渡 辺 信 秀



富山県庁



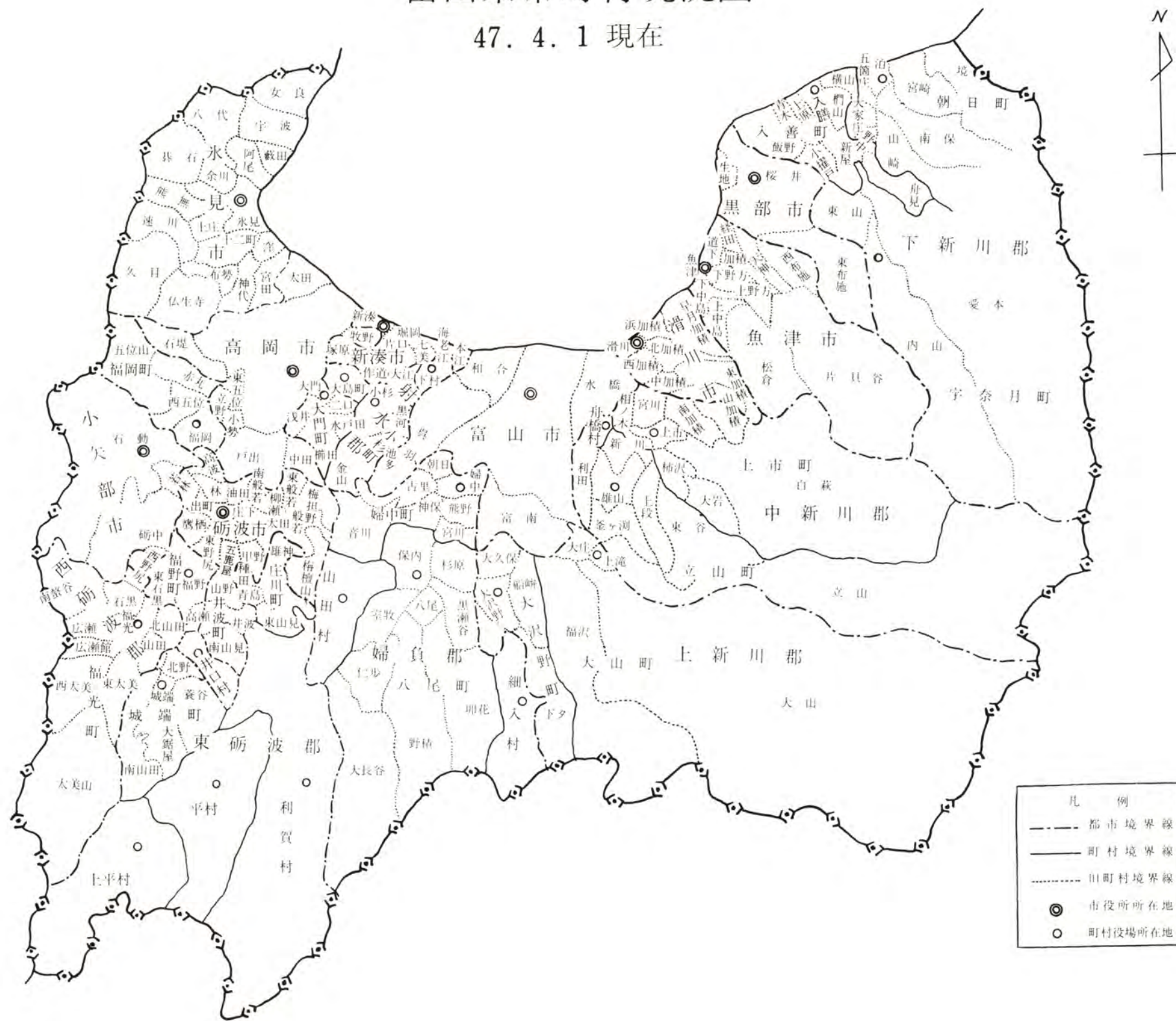
県議会議場内部



富山県会議事堂

富山県市町村現況図

47. 4. 1 現在



監 修

高瀬 重雄 県史監修者(富山大学教授文学博士)

編集及び執筆者

赤羽 一男 県民課主事
石崎 直義 県史編さん専門委員
稲垣 剛一 同
漆間 元三 総務課主幹
奥田 淳爾 総務課県史編さん主任
小沢 昭己 高岡市立太田小学校教諭
川原 則正 総務課総務主任
北沢 俊嶺 県史編さん専門委員
北林 吉弘 富山中部高校教諭
久保 尚文 総務課主事
斉藤 敏雄 総務課県史編さん主任
佐藤 良正 県美術品管理嘱託
重杉 俊雄 県史編さん専門委員
笹島 正晴 総務部参事(前総務課長)
団野 彰 総務課主幹
広田 寿三郎 総務課嘱託
前田 英雄 教育研究所研究主事
山本 豊 県民課長
吉沢 正敬 文化課長(前県民課広報主幹)
米原 寛 総務課主事

(アイウエオ順、敬称略)

撮 影

大野 達郎
清原 為芳

表紙・見返し

越中紙社

あ と が き

置県90周年記念事業の一環として、原始時代から現代まで、さらに置県100年に向けて富山県の発展の過程を総合的にとらえた「富山県のあゆみ」の発刊を進めておりましたがこのたび刊行のはこびとなりました。

本書は、歴史的な文化遺産である貴重な史料を写真で紹介し、しかも読みやすく親しみやすい表現にすることによって、県民の皆さん、とくに次代を背負う青少年の皆さんに十分理解していただき、ふるさとへの愛情を深めていただけるように努めたつもりです。

編集にあたっては、富山県史監修者文学博士高瀬重雄氏の監修のもとで、県史編さん専門委員の方々をはじめ、関係者の積極的なご協力により極めて短期間に完成をみることができました。

だれでも読める、親しみやすいものを、極めて短期間にまとめなければならなかっただけに、本書の編集に直接たずさわった総務課の県史編さん担当職員や、県民課の担当職員は、資料調査、収集、執筆に日夜精力的な努力を重ねたものであります。

おわりに、本書の刊行に際し、貴重な資料の提供など特別のご便宜をいただいた方々や関係者の氏名を明記して、心からのお礼にかえさせていただきます。

昭和48年5月9日

富山県総務部総務課長 黒崎政雄

定 価 1,100円

発 行 日 昭和48年5月9日

発 行 富 山 県

富山市新総曲輪1番7号

企画・編集 富山県総務部総務課・県民課

発 売 所 富山県教科書供給所

印 刷 株式会社チューエツ